

1・2区 土層名

- 深黒灰色粘質土(旧耕土)
- 淡灰色粘質土 3. 灰色粘質土
4. 黄灰色粘質土
5. 淡灰褐色シルト質粘砂(旧耕土)
6. 淡灰色粘質土(旧耕土)
7. 隆起褐色粘質土(旧耕土)
8. 灰褐色粘質砂(上面が透晴面)
- 9'. 淡灰色粘砂 9. 淡灰褐色シルト質粘砂
10. 淡灰褐色シルト質粘砂
11. 淡灰褐色シルト質砂
12. 淡灰褐色シルト質砂

3・4区 土層名

1. 深黒灰色粘質土(旧耕土)
2. 灰褐色粘質砂 3. 黄灰色粘質土(旧耕土)
4. 黄褐色粘質砂 5. 灰黄色粘質砂
6. 灰茶色粘質砂(上面が透晴面)
7. 灰(黄)色シルト 8. 灰黄色色シルト
9. 灰(黄)色シルト

10. 灰(黄)色シルト混じり粘砂～中砂

11. 黄褐色シルト質粘砂
12. 淡灰褐色混じり細砂～粗砂
13. 淡灰茶色混じり細砂～粗砂
14. 灰色中砂
15. (黄)色混じり細砂～粗砂
16. 淡灰(黄)色粗混じり粘砂
17. 灰(茶)色中砂 18. 淡灰褐色シルト～粘土
19. 黑灰色シルト～粘土

5区 土層名

1. 淡灰色粘質土
2. 黄灰色シルト質粘砂
3. 淡灰(黄)色シルト質粘砂
4. 灰色混じり粘砂～中砂
5. 淡灰(茶)色中砂～粗砂
6. 淡灰茶色～淡灰中砂～粗砂
7. 淡灰褐色シルト～粘土

6区 土層名

1. 灰褐色シルト質粘砂(S E01埋土)
2. 淡灰褐色シルト質粘砂～粗砂(S E01埋土)

7・8区 土層名

1. 黄灰色シルト 2. 灰黄色粘質砂
3. 灰(黄)色粘質砂
4. 灰色粗砂混じりシルト
5. 灰(黄)色シルト 6. 灰色シルト
7. 黄灰色シルト 8. 灰黄色シルト
9. 灰(黄)色シルト質粘砂
10. 灰黄色シルト 11. 灰角粘質砂
12. 黄褐色シルト質粘砂
13. 淡灰褐色シルト質粘砂
14. 灰褐色シルト～粗砂
15. 淡灰褐色粗砂～粗砂(上面が透晴面)
16. 灰色中砂～粗砂
17. 淡灰褐色シルト
18. 黑灰色シルト～粘土 19. 黑灰色粘質砂

fig.88 調査地平面図・断面図

調査地が当該時期の集落域の中心近くに位置していることが明らかになり、大きな成果を得ることができた。前述のようにピットのなかには掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられるものも含まれており、未調査部分に建物が存在することは確実である。

遺物については、28リットル入りコンテナ2箱分出土しており、遺構の中では井戸（SE01）から最も多く出土している。SE01からは、特に注目される遺物として韓式系土器（軟質）が出土している。

韓式系土器については、当遺跡ではこれまでにも一定量確認されており、渡来人あるいはその影響を受けた人々の生活痕跡を示すものとして從来から注意が払われてきた。今回は調査区の限界により井戸そのものの正確な規模や形状について明らかにできなかったが、井戸から出土したことは、ごく近い場所にこれらの人々が生活していたことを反映しているといえよう。今回確認した他の遺構からは確実に韓式系土器といえる遺物は出土していないが、前述したように未調査部分には掘立柱建物が存在する可能性が高い。これらの建物と井戸との関係が注目されるが、今回の調査結果のみでは断定的なことはいえない。今後は遺物の詳細な整理作業を実施し、既存の調査結果や今後の周辺地での調査の成績を踏まながら、検討していくなければならない。

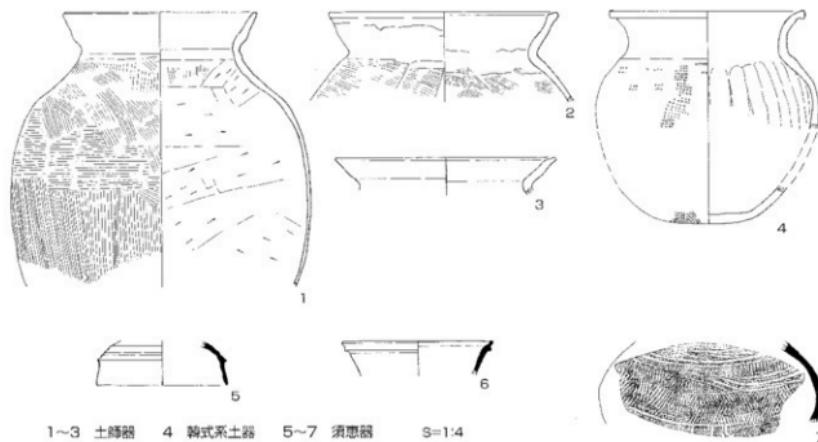
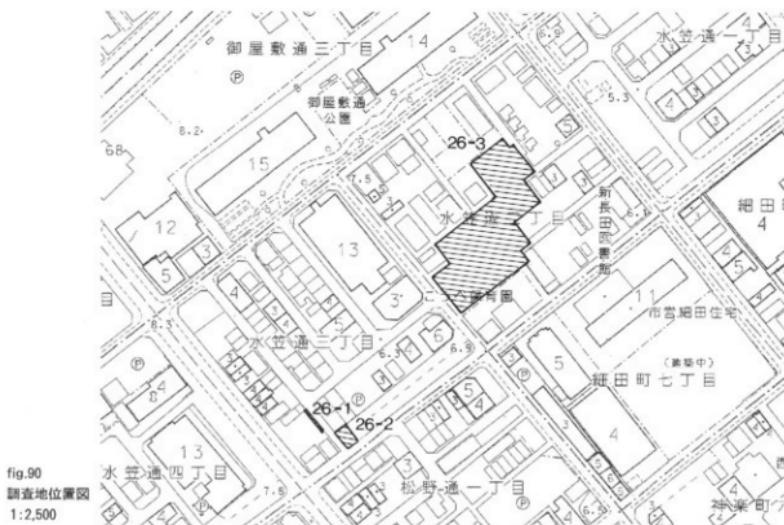


fig.89 出土遺物実測図

1. はじめに

水笠遺跡は、神戸市長田区水笠通2・3丁目に所在する、弥生時代・古墳時代・中世の遺跡であり、妙法寺川と新湊川の間の冲積地に立地している。

水笠通3丁目区画内においては、区画整理事業の工事に先立って、区画街路部分や民地部分の発掘調査を平成11年度以降実施てきており、次第に遺跡の状況が判明してきている。今回実施した調査も、新長田駅北地区土地区画整理事業に伴うもので、区画街路部分について実施したものである。



2. 調査の概要

調査地は3ヶ所に分かれている。北西側の新設側溝部分を第26-1次調査、南東側の街路部分を第26-2次調査、2丁目区画内の公園築造部分を第26-3次調査として調査を実施した。調査地の現標高は、約8mを測る。

26-1次

幅1m、長さ約14mの調査区である。後世の擾乱による削平が顕著で、遺物包含層や遺構面基盤層がほとんど残存していない。南半部西壁際でピット1基（SP01）を検出したが、ほかに遺構は検出されなかった。

26-2次

東西5.8m、南北10.5mの調査区で、現地表下30~50cmで淡灰黄色シルト質細砂上面を基盤層とする遺構面を確認し、溝1条、ピット9基を検出した。溝幅20~40cm、深さ4cm程度の浅いもので、鋪溝の可能性があるが、詳細は不明である。ピットは径20cm程度で、深さは15~30cmのものが大半である。調査区内で明確な建物としてのまとまりは確認できなかったが、SP01~03については、その可能性が若干考えられる。遺構内からは全く遺物が出土していないため、各遺構の時期については不明である。

出土遺物も全体的に少量で、旧耕土から中世の須恵器・土師器片が少量出土したほか、遺構面検出中に平安時代頃のものと考えられる須恵器壺の体部下半～底部の破片が1点出土したのみである。

26-3次 公園整備に伴う試掘調査の結果、文化財の存在が確認された箇所について調査を実施した。調査区を7区に設定し、調査区西側から順次調査を実施した。

1~4区 調査区西半部の調査区である。淡黄灰色シルトを基盤層とする遺構面は、中世以降の耕作により全面的に削平されている。3~4区は建物の基礎工事によって大きく影響を受け、遺物包含層は存在しない。遺構面直上の旧耕土層より、中世の遺物が少量出土した。遺構は、1・2区で中世の溝3条と、3区でピット数基を検出したに留まる。この様相は、調査区の西の街区である1丁目の調査成果と同様である。

S D101 1区から7区にかけて、ほぼ直線的に流れる溝であり、南側へ流下する。幅30~40cm、深さ5~30cm、検出長約75mである。埋土は、下層は自然堆積しているが、上層はブロック状の堆積が見られ、人為的に埋められたと考えられる。6世紀後半の遺物が少量出土したが、堆積土に中世以降の耕作土が含まれ、中世の遺構である可能性が高い。

5~7区 調査区北東部の調査区である。北西部は、遺構面直上層である暗灰色粘質土が20~30cmの厚さで残存しており、6世紀後半の遺物を良好に包含している。遺構面からは、畑作に伴う畦溝、掘立柱建物等が検出された。南東部は、1~4区と同様、搅乱の影響が大きく、ピット数基と溝状遺構が少量検出されたに留まる。

畦溝 6・7区の北半部分で、幅20cm程度の溝が7条検出された。約1.7mの間隔で平行して検出され、畦溝と考えられる。埋土より出土した遺物は細片であり時期を特定できないが、S B101に伴う柱穴に切り込まれていることから、6世紀後半以前の遺構である。

8区南半部分で、幅50~80cm程度の溝が5条検出された。約1mの間隔で平行して検出され、畦溝と考えられるが、残存状況が悪く、形状も不定形であり、詳細は不明である。

S B101 3×5間以上の掘立柱建物である。柱掘形は、直径50cm程度のプランを基本とする。北

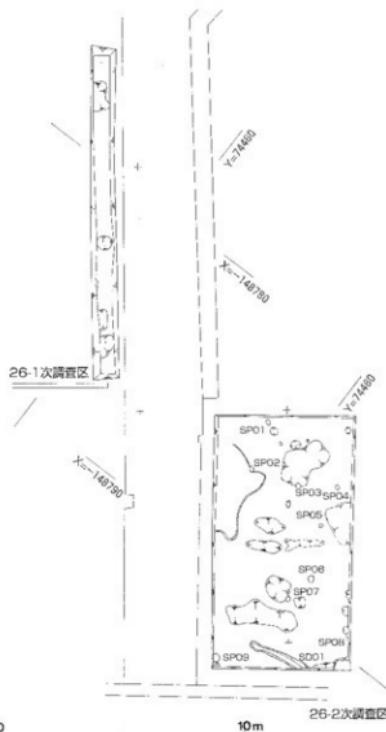


fig.91 26-1+2次調査区平面図

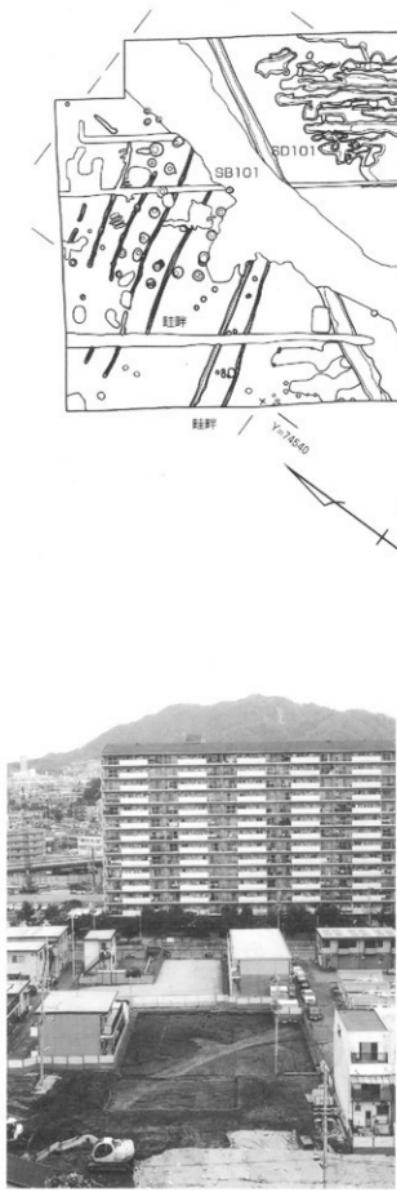


fig.92 26-3次調査区全景

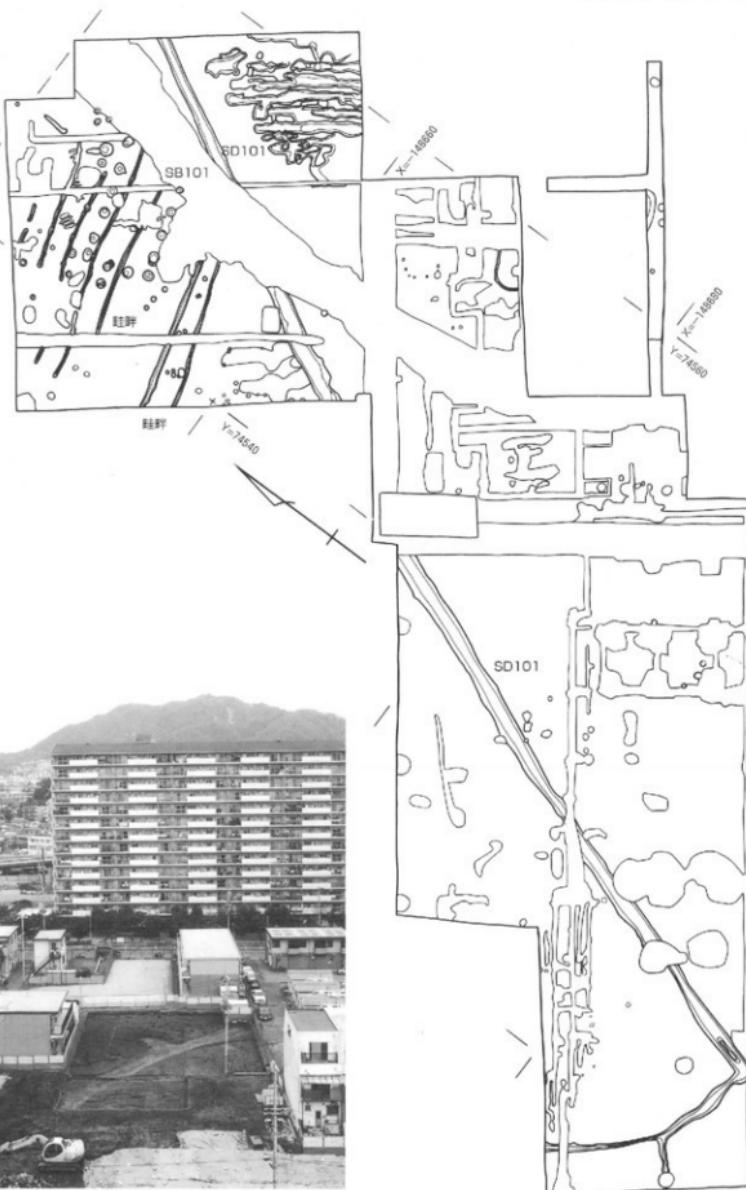


fig.93 26-3次調査区平面図

fig.93 26-3次調査区平面図

面の柱列の北側では、2間置きに直径40cm程度のやや小型の柱穴が検出され、庇等の施設が想定される。南側にも同様の造構の存在が想定されるが、擾乱により確認できない。

遺物は、柱穴掘形より6世紀後半の遺物が出土している。

3. まとめ 第26-3次調査区では、南西部の造構の分布は希薄であるが、北東部において6世紀後半の良好な遺物包含層と造構面が確認された。

古墳時代後期の造構面は、北西から南東方向に緩やかに傾斜しており、標高の高い部分を中心に遺物包含層の形成と造構の広がりが見られる。検出された造構は、掘立柱建物1棟と柱穴、建物以前の耕作に伴う溝であり、集落の様相を知る成果を得ることはできなかった。しかし、良好な遺物包含層の存在からは、より高位の西側部分に集落の広がりを想定することができ、今回造構がまとまって検出された6・7区の西側部分に、掘立柱建物より古い段階に耕作が行われていたことが確認できたことは、土地利用の変化を考える上で重要である。

水笠遺跡で当時期の造構が確認されたのは初めてであり、当地域の古墳時代の様相を知る上で重要である。六甲山南麓の古墳時代後期の集落の分布は不明な点が多く、周辺の遺跡でも当時期の造構の検出は少ない。水笠遺跡周辺では、5世紀後半の遺跡は、松野遺跡、神楽遺跡、戎町遺跡等で集落の存在が確認されているが、6世紀以降の資料はほとんど確認されていない。水笠遺跡は、この点において、当地域の古墳時代後期の集落の様相を示す遺跡として重要であるといえる。

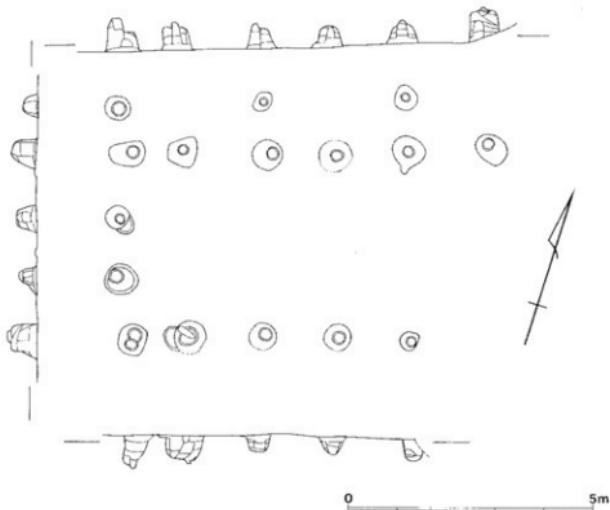


fig.94
SB101
平面図・断面図

15. 二葉町遺跡 第17-1~7次調査

1. はじめに

二葉町遺跡は、六甲山系から流出する妙法寺川と茹藻川によって形成された沖積地の自然堤防上に立地する集落遺跡である。昭和63年の第1次調査以来継続して発掘調査が実施されており、今年度は第17次調査に当たる。

平成8年度からは新長田駅南第2地区の市街地再開発事業に伴い、腕塚6丁目・久保町6丁目および二葉町6丁目で調査が行われており、縄文時代晚期の自然流路、弥生時代前期の溝、奈良時代の掘立柱建物・井戸、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・鳥帽子を伴う木棺墓などが検出された。特に11世紀末から12世紀前半に廃棄され井戸枠として転用された「複材構造船」は当時の船舶の実態を知る上で貴重な資料となっている。



fig.95
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

調査は、再開発事業に伴うもので、除却の完了した部分より開始し久保6丁目・二葉町6丁目区域内の計7ヶ所について実施した。順次第17-1~7次調査とした。

17-1次

当調査区は盛土下に2枚の旧耕土層があり、それを除去すると厚さ約20cmの暗灰～黒色細礫混じり細砂が堆積しており、中世の遺物を包含していた。遺構面はこの層の直下で検出された。8基のピットや、北西から南東に延びる小溝とそれを切る東西方向の溝（SD 101）および調査区北隅で直径約2m、深さ70cmの土坑（SK 101）を検出した。SD 101からは11世紀代と考えられる完形の須恵器碗が1個体出土したが、他の遺構からの遺物は少量かつ細片で時期等を確定することが困難である。

17-2次

当調査区も基本層は17-1次調査区と同じで、暗灰～黒色細礫混じり細砂層の直下が遺構面となっている。遺構は南北方向の小溝6条と東西方向の小溝1条および柱穴15基が検出された。遺構の前後関係も17-1次調査区と変わらず、南北方向小溝→東西方向小溝

→柱穴の順で新しい。小溝からは遺物が出土せず時期を決し難いが、柱穴の1つ（Pit 101）から12世紀末～13世紀初頭頃の須恵器碗の破片が出上している。

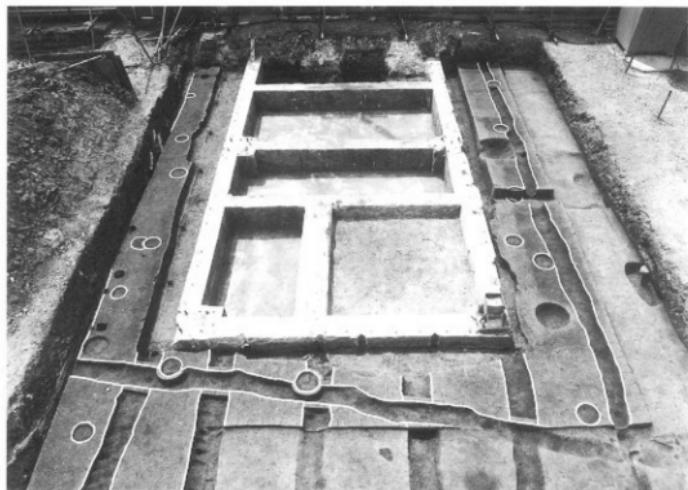


fig.96
17-2次
調査区全景

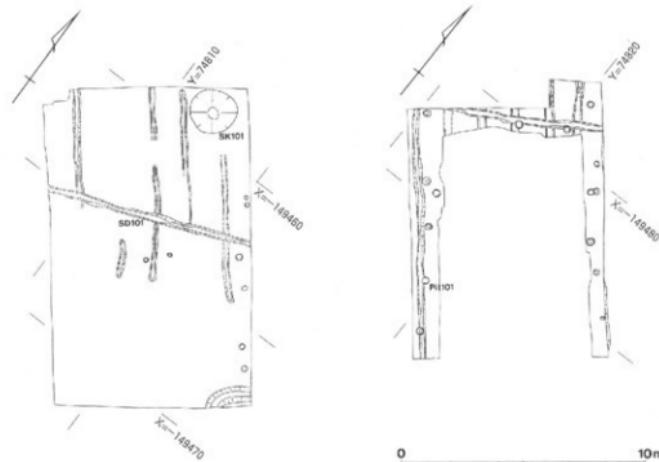
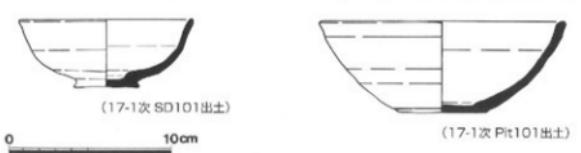


fig.97
17-1・2次
調査区平面図

fig.98
出土遺物実測図



17-3次

調査区は、南に下がる緩やかな斜面上に位置しており、南半分と北半分において堆積状況は大きく異なる。調査区の北においては、近現代の盛土、褐色細砂（中世耕土）、暗褐色極細砂、遺構面となり、一方南半分においては、近現代の盛土以下に近世頃の耕土が複数堆積して遺構面となる。おそらく近世段階において耕作地の造成がなされたために中世頃の堆積は削平を受けたと考えられる。

調査区の北半分で掘立柱建物3棟、井戸2基、ピット数基を南半分においてピット2基と溝状の遺構が検出された。

S E 01は、4間×2間の南北棟の掘立柱建物で南北に廂が取り付く構造をもつ。南北

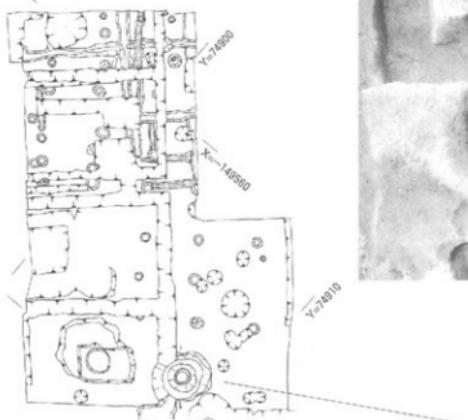


fig.100 17-3次調査区平面図



fig.99 S E 01

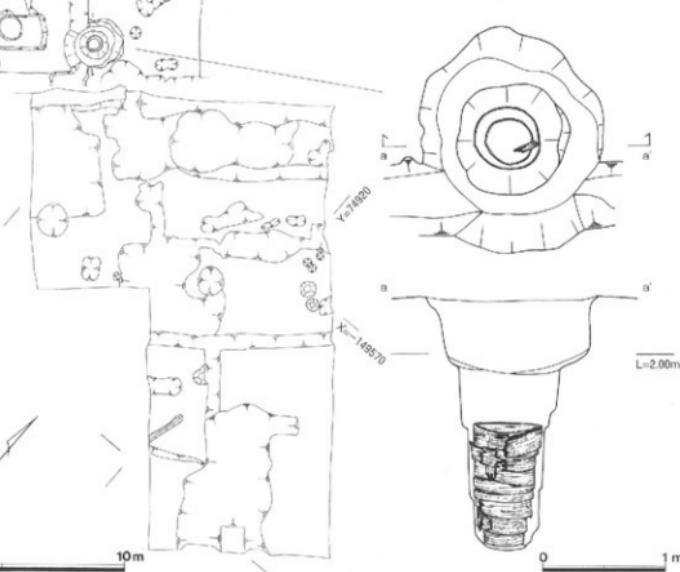


fig.101 S E 01平面図・断面図

7.0m、東西4.5mの規模を有する。

S B02は、S B01を切る2間×3間の建物で、南北5.0m、東西6.5mの規模をもつ。柱間は、2.4mを測り、さらに調査区外に拡がる可能性がある。

S B03は、上記の2棟から少し南に離れた場所に位置する2間×2間の建物で南北3.4m、東西に4.8mの規模をもち、さらに東側の調査区外に拡がる可能性がある。

なお、これらの建物は、すべて真北から32度西へふる角度で建てられている。

S E01は、S B03の南隣で検出された直径約2.5m、深さ2.6mの井戸である。断面形は3段の漏斗状に掘り込まれており、さらに湧水部には曲物が掘えられている。曲物は、徐々に径が小さくなるよう7個体が組まれている。

S E02は、素掘りの井戸で直径約1m、深さは、検出高で0.7mを測る。

17-4次

調査区は久保町6丁目地区の北側にあたる。基本層序は、近現代の盛土に近世の耕土が1～4層堆積し、東側では中世の耕土を挟んで中世の包含層である暗灰色砂質粘土、黄灰色粘土の地山層に、西側では暗灰色砂質粘土の下に縄文時代晚期の明黄橙色粗砂の堆積がみられる。

検出された遺構は、南北方向の耕作痕と東西方向に調査区を横断する溝が2条と土坑1基である。

耕作痕は20数条確認されどれも幅30cm、深さ5cmほどで調査区の東側に集中している。S D01および02は幅1.0～0.5mで耕作に伴う施設と考えられる。

17-5次

調査区は久保町6丁目地区の南西隅部にあたる。基本層序は、近現代盛土、灰白～黄灰色細砂、褐灰色細砂（旧耕土）、明黄褐粘土（床土）、黒褐色粗砂混じり粘土（旧表土）、遺構面となっている。遺構面の標高は約3.4mである。遺物は主として褐灰色細砂に含まれるがその量は極少量に留まる。

調査区南西部は現代の建物の基礎工事によって遺構面の残存が見られなかつたが、その他の部分に関しては残存状況が良好で、弥生時代前期と考えられる溝2条と平安時代の掘

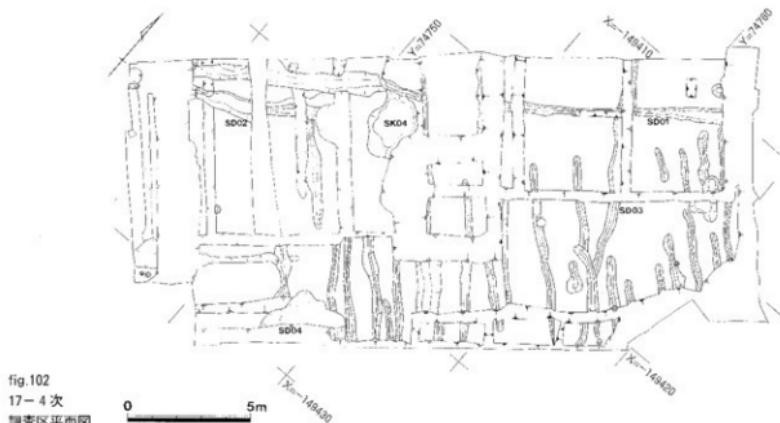


fig.102
17-4次
調査区平面図

立柱建物1棟と建物に伴う雨落ち溝2条および、柱穴を切る土坑1基などが検出された。

弥生時代前期の溝は幅約0.9m、深さ約0.3mで南北方向のS D03と東西方向のS D04で出土遺物はなかったが、先年度に調査されている同期の溝と方向・規模などが一致することより弥生時代前期のものと判断した。

平安時代の掘立柱建物（S B01）は3間以上×3間以上のもので、北および西側に幅約10~40cm、深さ約5~15cmの雨落ち溝が伴う。東西6.7m以上、南北6.2m以上の規模を有する。柱穴は1箇所を除き検出面からの深さが40~50cmを測るものが多く、70cmに及ぶものもある。柱穴内の柱痕部から11世紀末~12世紀初頭の須恵器壺・土師器皿が出土したものがあり、S B01はこの時期と判断される。

17-6次

当該地は久保町6丁目地区の北西隅部になる。基本層序は、近現代盛土、明黄褐色細砂、オリーブ黒色細砂～シルト（近現代耕土）、灰色中砂、灰色細砂～シルト（平安時代以降耕土）、明黄褐色粘土（床土）、遺構面となっている。遺構面の標高は約3.9mである。

遺物は主として灰色中砂、灰色細砂～シルトに包含される。11世紀~12世紀代のものが

fig.103
17-5次
調査区平面図

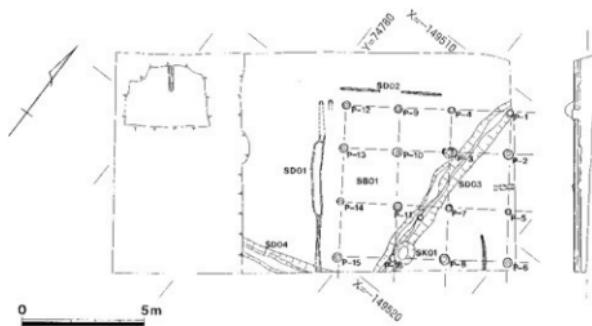


fig.104
S B01
Pit断面図

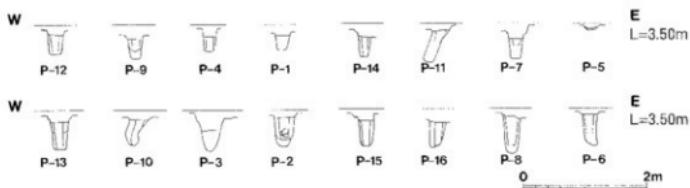


fig.105
17-6次
調査区平面図

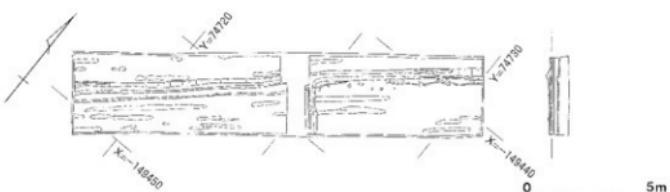




fig.106
17-5次
S D01

多いものと思われるが、やや新しいものも含まれている。

平安時代以降の耕土に伴う床土を除去すると、東西方向の溝（S D01）が検出された。S D01は幅約60cmで北側の40cmが一段深くなっている、そこでの深さは約15cmである。溝底レベルはほぼ水平で（西端と東端では西端が約2cm低い程度）ある。調査区中央部ではS D01に合流する南北方向の細い溝が検出された。

S D01内の遺物は少ないが11世紀末～12世紀ごろの須恵器などが出土している。溝の両側から東西方向の鋤溝が検出されたことより、S D01は平安時代の田圃の区画溝の可能性が高いものと考えられる。

17-7次

当該地は二葉町6丁目地区の南東部で、調査の結果南北方向の小溝、柱穴や土坑などが検出された。各遺構からの出土遺物は極めて少量でその所属時期を現時点では決定できないが、周辺の状況から推定して平安時代から鎌倉時代のものと思われる。

近現代の搅乱により遺構面の残存状態は良好とはいえないが、検出された柱穴には深さ約35cmを測るものもあり、本来の遺構密度を即断はできないものと考えられる。

出土遺物のなかには7世紀代や奈良時代から平安時代にかけての須恵器小片なども見られ、同期の遺構が周辺部に存在する事も推測される。

3. まとめ

二葉町遺跡は、過去に行われた発掘調査から主として平安時代から鎌倉時代にかけての集落遺跡とされる。今回の調査においても当該時期の掘立柱建物や井戸および生産域としての田畠が確認され、二葉町遺跡の集落構造についてより詳細な資料をえることができた。



fig.107 17-7次調査区平面図

16. 松野遺跡 第38-1～4次調査

1. はじめに

松野遺跡は、神戸市須磨区千歳町・常盤町から長田区松野通・日吉町・若松町にかけて広がる、弥生時代及び古墳時代の遺跡である。妙法寺川左岸に立地している。

松野遺跡においては、これまでに37次に及ぶ発掘調査を実施してきており、松野通4丁目で実施した第1次調査では、古墳時代後期の豪族居館跡などを検出している。



2. 調査の概要

今回実施した調査は、應取東第二地区土地区画整理事業に伴うもので、区画街路部分4ヶ所において調査を行った。着手順に第38-1～4次調査と呼称する。以下、各調査区ごとに概要を記述する。

38-1次 調査区の西半部は搅乱されており文化財は存在しない。また東半部も耕作などによる搅乱が遺構面に達しているもののピットが数基確認された。建物としては纏まらず、時期も不明である。

38-2次 常磐町1丁目区画の北西部において実施した調査で、建物の基礎および地下鉄敷設時の搅乱によって遺構面のほとんどが失われている。

38-3次 常磐町1丁目区画の南西隅において実施した調査である。平成14年度に実施した第33-2次調査地の南側に位置する。調査区北端部では現地表下約75cm、調査区南端部では現地表下約40cmで、周辺地における調査において遺物の出土が報告されている暗灰褐色シルト～粘土層（厚さ約15cm）を確認し掘削を行った。その結果、弥生土器あるいは土師器と考えられる破片が2点出土したに止まった。その下層の淡黄灰色～黄灰褐色シルト上面で遺構面を確認し、溝1条、ピット6基を検出した。

S D 01 調査区北端部で検出した、幅1.5m、深さ20cmの溝で、北東～南東方向に流れる。弥生土器片1点が出土した。1点のみの出土であるため、直ちにこの溝が弥生時代のものであるとは断定できない。今後周辺地での調査成果と照合するなど詳細な検討を行ったうえで

確定したい。

ピット 計6基検出したが、うち北側の4基は上記のSD01に切られている。南側で検出したSP06から土師器片1点が出土しているが、詳細な時期については、不明である。以上のピットが建物の柱穴であるかどうかについては明確ではないが、南側の2基については、可能性は低いと考えられる。北側のピットについては、可能性はあるが、調査区内ではその縦まりを認めることはできない。

38-4次 常磐町1丁目区画の北端部において実施した調査である。

現地表下約65~90cmで、遺物包含層である暗灰褐色小砾混じりシルトを検出した。この層からは北西部のみ弥生時代末頃の土器が出土しており、そのほかでは遺物は出土しなかった。その下層で、周辺地での調査においては遺構面基盤層となっている黄灰褐色~褐灰色シルト上面を検出したが、遺構は全く検出されなかった。

3.まとめ 今回の調査では遺構・遺物ともにわずかに検出したにとどまった。このことは、今回の調査地が松野遺跡の西端部に位置していることを示すものである。隣接地における調査結果もそのことを裏付けており、松野遺跡の集落域が常磐町2丁目の区画には延びないことを示しているといえよう。

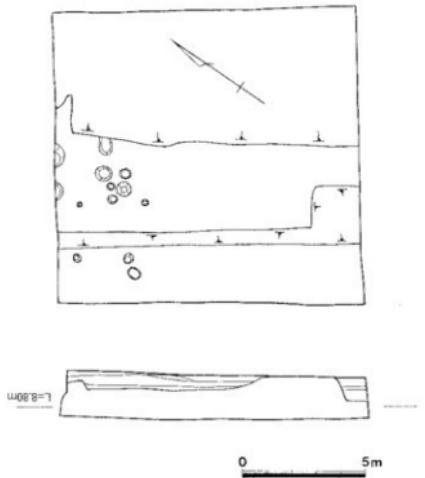


fig.109 38-1次調査区平面図・断面図

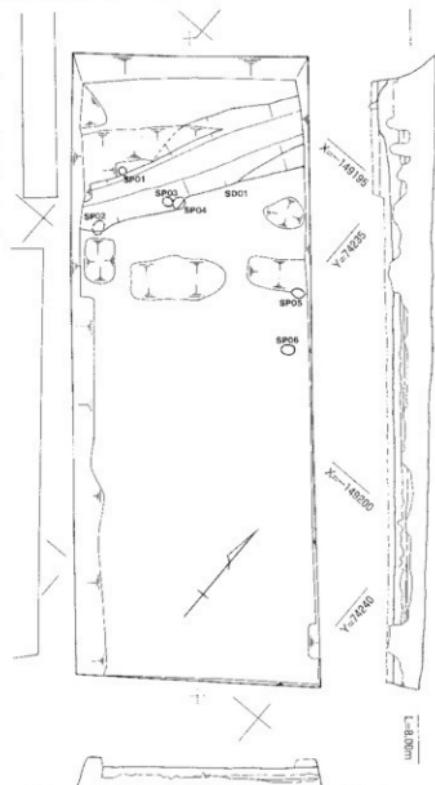


fig.110 38-3次調査区平面図・断面図

1. はじめに

戎町遺跡は、須磨区戎町および寺田町一帯に広がる広範な遺跡で、弥生時代前期から鎌倉時代に至る複合遺跡である。特に、弥生時代前期から中期と、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落の最盛期を迎へ、豊富な遺構や遺物が検出されている。

近年、当遺跡の南端部の寺田町近辺では区画整理事業に伴う発掘調査が増加し、遺跡の範囲がさらに南側に広がることが明らかになり、弥生時代中期を中心、西側部分に居住域、東側部分に周溝墓を中心とする墓域の存在が確認されつつある。

周溝墓は方形のプランを持つものが主体で、ほぼ東西及び南北方向の溝による区画を意識して築かれている。寺田町一帯は後世の耕作や從前建物の基礎等の影響により、すでに遺構面が失われている部分が多く、周溝墓についてはマウンドの残存状況は悪く、主体部の痕跡を失っているものが多いが、周溝部はよく残っており、溝内に供獻土器を伴う例が多く認められる。

なお本調査の詳細な成果については、平成17年3月刊行の『戎町遺跡 第35・38・50・56次調査 松野遺跡 第32・33・38次調査』を参照いただきたい。



fig.111
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

調査は、区画整理事業に伴うもので、除却の完了した部分より開始し計8ヶ所について実施した。順次第50-1~8次調査とした。

基本層序

調査区周辺における土層の堆積状況は、表土・盛土層下に、ほぼ全域で旧耕土層が残り、その下に部分的に暗灰色粘質土層が残る地区がある。この面から、溝底に明瞭に跡跡が残る耕作痕の溝が掘り込まれる。その下に褐色シルト層、黄色シルト層が堆積する。南側では黄色シルト層は無く、褐灰色の砂質土層が堆積する。シルト系の褐色層は黄色層の土壤化層と考えられる。褐色層面で遺構が見えはじめるが、平面プランは不明瞭であり、ほと

んどが黄色シルト層面で確認できる。北側ほど削平が顕著であり、大半は盛土直下で黄色シルト層の遺構面となる。

50-1次 平成13年度調査の第35-6次調査区に接する。遺構検出面は、表土下約30~40cmである。調査区中央部に搅乱が見られる以外に建物の基礎等による影響は少ないが、後世の耕作により遺物包含層は失われている。遺構面は、標高の高い調査区北端部を除き良好に遺存している。検出構造は、耕作痕と周溝墓に伴う可能性のある溝状遺構2条、弥生時代中期前半の竪穴住居1棟である。溝状遺構からは弥生時代中期中葉の遺物が出土している。

50-2次 平成13年度の第35-4・5次調査及び平成14年度の第38-12次調査の時点で既存建物のために十分掘削が行えなかった範囲について、建物の除却後に行われた個人住宅建設に伴う調査（第49次調査）と並行して、先の調査区と接続するよう調査区を設定した。旧耕土層の下に薄い暗褐色シルト層の包含層があり、土壤化した褐色シルト層下の黄色シルト層が遺構面である。古墳時代後期、弥生時代中期の遺構を同一面で検出した。

第35-4次調査から続く方形周溝墓に伴う溝、古墳時代後期の竪穴住居、第38-12次調査からの供献土器を伴う大規模な溝などが検出された。

50-3次 寺田町2丁目②番街路の調査である。南北長28m、幅2mの調査区を設定した。

調査区内の堆積は、旧耕土層の下に南側を中心に黒色シルト層の堆積があり弥生時代の包含層となる。直下の褐灰色砂質土が遺構面を形成する。周溝墓を構成する溝をはじめ、土坑、住居址状遺構、柱穴を検出した。

50-4次 寺田町1丁目の街路拡幅部の調査で、幅約4.5m、長さ約4.5mの範囲で実施した。

調査区は北から南、東から西に傾斜した地形に位置する。検出した遺構は溝1条、鍛溝5条である。溝は個人住宅部分（第51次調査）で検出した溝に伴う同一の周溝墓を構成する溝と考えられる。

50-5次 第35-4次調査地の北側に接する調査地である。南から続く周溝墓に伴う溝2条と土坑、柱穴を検出した。また北側では周辺の調査地で見られる耕作痕を5条確認した。

50-6次 寺田町1丁目②番街路南端に位置する幅約7m、南北長10mの調査区である。北側に位置する調査地（第38-11次調査）や周辺の個人住宅建設に伴う調査では周溝墓に伴う溝を確認しており、溝の集中する地区である。盛土、旧耕土層、黒色シルト層（弥生時代遺物包含層）を除去した灰黄色砂質シルト層面で周溝墓を構成する溝4条、同様に平面形が長

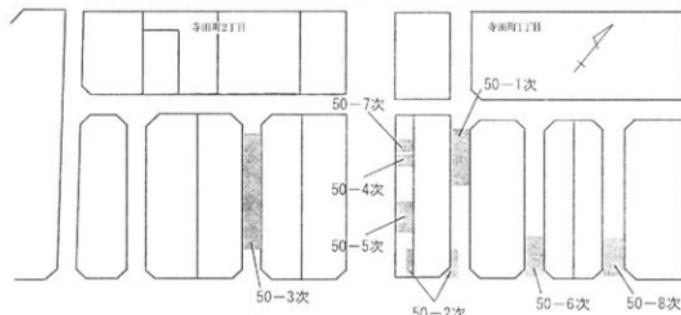


fig.112
調査区位置図

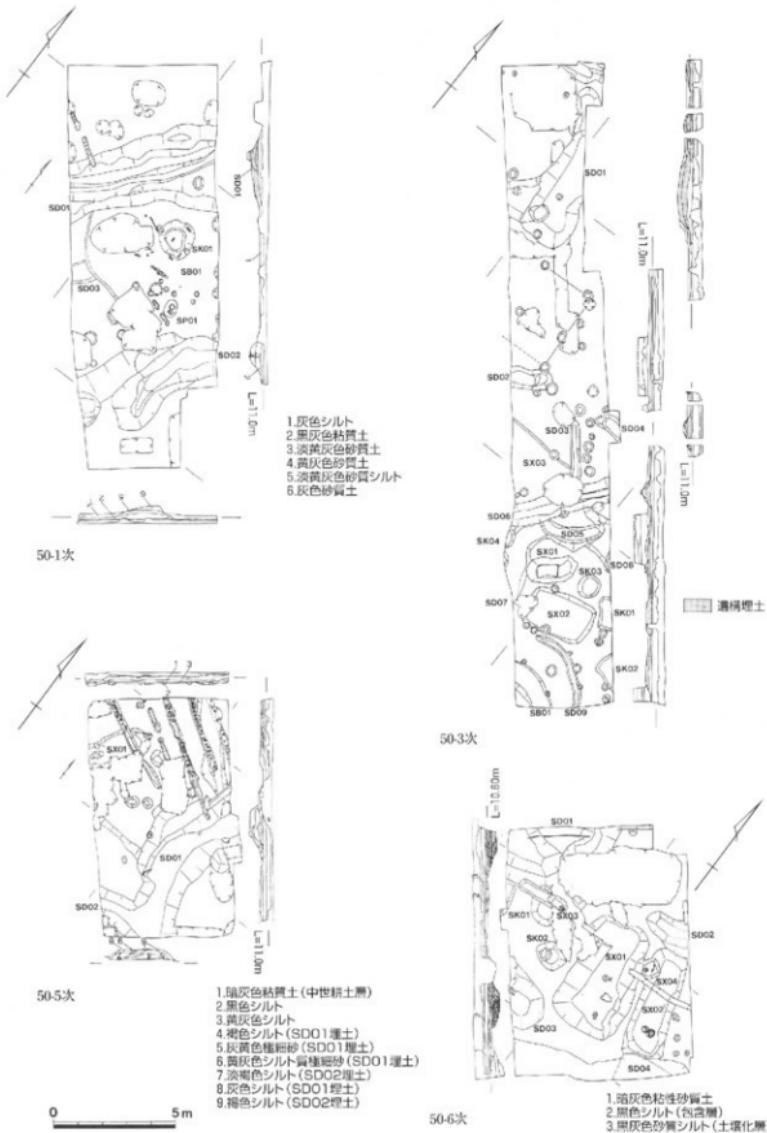


fig.113 50-1・3・5・6次調査区平面図・断面図

方形の土坑状の溝2条がみつかり計3基の周溝墓が接する部分に相当することが確認された。この他に土坑、柱穴、落ち込みを検出した。

50-7次 寺田町1丁目④番街路拡幅部分での調査である。從前建物の基礎により造構面が失われており、付近の調査で確認されている造構面下に堆積する黄色シルト層は遺存するものの、周溝墓に伴う溝等の深い造構も確認されなかった。

50-8次 寺田町1丁目①番街路南端での調査である。從前の建物の基礎は規模が大きく、南端の基礎の間にわずかに造構面が残る部分を確認し、幅30cm、深さ20cmの溝を1条検出した。

3. まとめ 年度の調査では、寺田町1丁目を中心多くの造構、遺物が検出された。特に周溝墓が広い範囲に展開する様子が見られ、街区の南側、やや下がり地形となった部分では、溝や供献土器が良好に遺存することが判明した。小規模な調査も含めて、弥生時代の景観を復元する上で重要なデータが得られたものと考える。

周溝墓に伴う溝では、大型の長方形の土坑状を呈する区画溝が検出され、陸橋部を明確に持つ周溝墓の存在が明らかとなった。これら周溝墓の形態差は、造墓集団の違いが大きく影響するものと想定されるが、土地の形状等、いろいろな要素によって規制されるであろうことを考える上で、今回の調査是有意義であったと思われる。

弥生時代に当地域の中核をなしたと考えられる戎町遺跡での生活を復元、解明する上で、この周辺での、特に墓域における調査成果は、重要な要素を占めるものと考える。



fig.114 50-5次調査区全景



fig.115 50-6次調査区全景

18. 戎町遺跡 第44~49・51~55次調査

1. はじめに

戎町遺跡の南部、須磨区寺田町1・2丁目周辺においては、区画整理事業の進行に伴って個人住宅等の建設が増加している。

これらの工事によって埋蔵文化財に影響を受ける部分については調査を実施した。

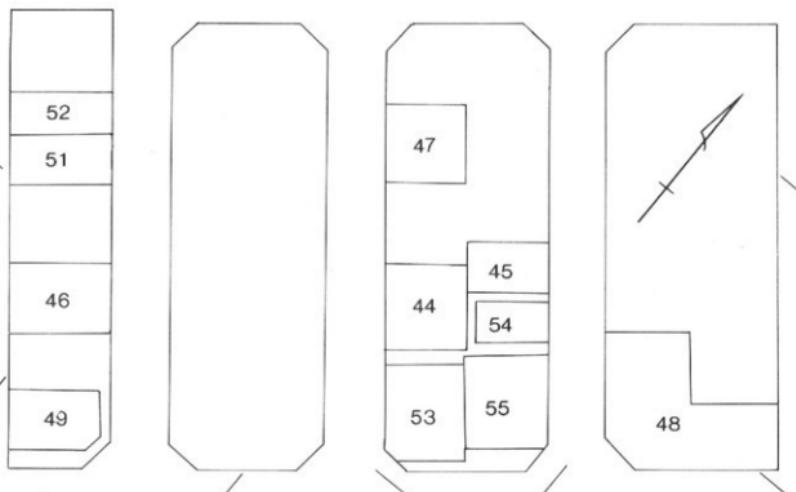
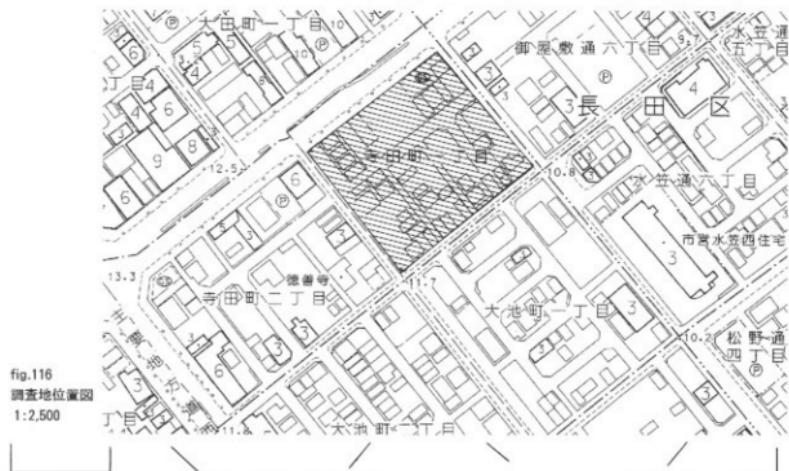


fig.117 調査区配置図

第44次調査

1. 調査の概要

検出された遺構は、溝6条、不明上坑1基、ピット1基である。

溝には、弥生時代中期中葉の方形周溝墓に伴う溝と後世の耕作に伴う溝がある。

S D101 幅約2m、深さ50cmほどの溝状遺構であり、ほぼ東西方向に掘削されている。第3および第6トレンチで検出されたS D102に接続する可能性が高い。埋土の堆積状況から周溝墓に伴う溝と考えられる。

S D102 幅約2.5m、深さ50cmほどの溝状遺構であり、ほぼ東西方向に掘削されている。溝底より弥生時代中期中葉の甕が1点出土した。周溝墓に伴う溝と考えられる。

S D103 幅約1.5m、深さ40cmほどの溝状遺構であり、ほぼ南北に掘削されている。S D101・102と同様に方形周溝墓と考えられるが、北側に対応する溝状遺構が無く、詳細なプランは不明である。

S D104 幅約1.2m、深さ30cmほどの溝状遺構であり、ほぼ北西方向から南東方向に掘削されている。上述の溝と同様の堆積状況を示す。S D103との接合については不明である。

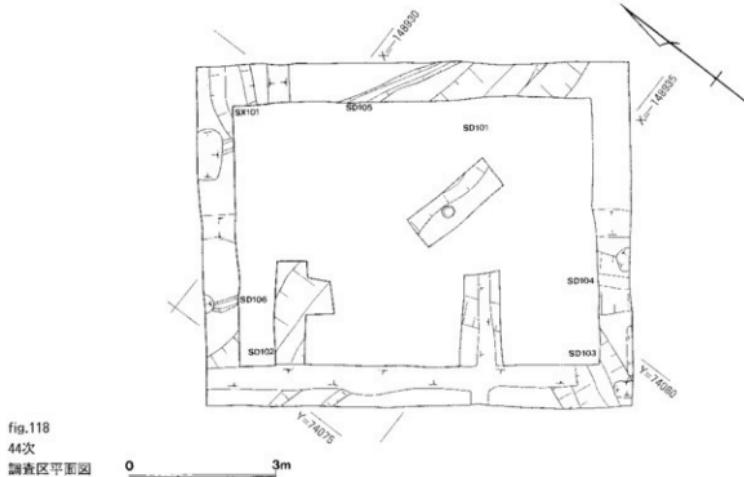
S D105・106 いずれも幅0.8m、深さ10cmの小規模な溝である。堆積土は中世以降の耕土で耕作に伴う溝と考えられる。

S X101 幅0.8m、深さ10cmの遺構である。溝状に延びる可能性もある。埋土は弥生時代中期の遺構と共に通するものの浅い。

2. まとめ

周溝墓に伴うと考えられる溝が数条検出されたが、主体部が検出されなかったことと、調査区の制約により詳細は不明である。

当遺跡で検出される溝状遺構は、1基の周溝墓に伴う溝と、墓域の区画を示す大型の溝があり、S D101とS D102が同一の遺構であれば、後者の可能性が高い。今後実施される近隣の調査成果と合わせて検討する必要がある。



第45次調査

1. 調査の概要 検出された遺構は、溝9条である。
溝には、弥生時代中期中葉の方形周溝墓に伴う溝と後世の耕作に伴う溝がある。
- 溝 幅30~40cm、深さ5~10cmの溝9条が検出された。うち、8条は50~60cm間隔で、北西から南東方向に掘削されている。耕起痕が残る溝が多く、畑作に伴う遺構と考えられる。遺物は少量出土したが細片であり、時期を特定できるものは無い。
2. まとめ 検出された耕起痕は、周辺の調査で検出されている耕起痕の方向と同様である。時期の特定は難しいが、堆積土壌は周溝墓の周溝の最終埋土と近似しており、周溝が埋没した後に耕起され、溝に堆積したと考えられる。しかし、周溝が埋没した後、畑作されるまでの時間軸は不明である。

第46次調査

1. 調査の概要 検出された遺構は、溝7条である。
溝には、弥生時代中期中葉の方形周溝墓に伴うと考えられる溝1条と後世の耕作に伴う溝6条がある。
- SD101 幅120cm、深さ約20cmの溝状遺構で擾乱の影響で形状は不明であるが、ほぼ東西に掘削されている。埋土より弥生時代中期の土器が少量出土した。堆積土と掘削方向から周溝墓に伴う遺構である可能性が高い。

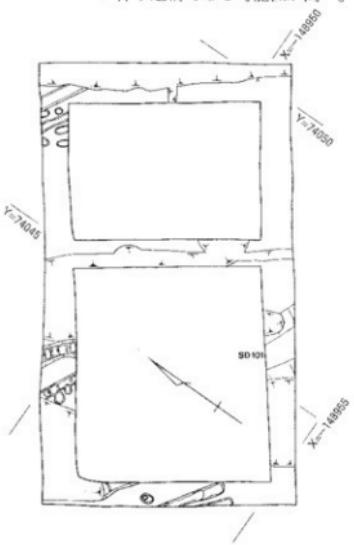


fig.119 45次調査区平面図

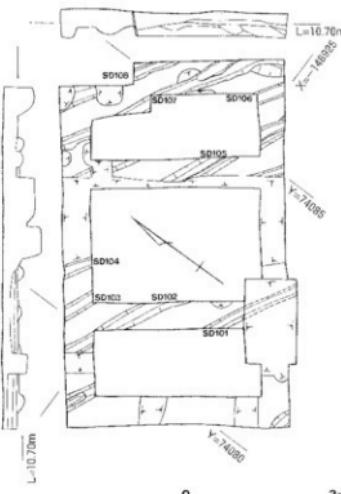


fig.120 46次調査区平面図

S D102～107 幅15～20cm深さ10～15cmの耕起痕が残る溝状遺構が6条検出された。いずれも北西から南東方向に掘削されており、周辺の調査で検出されている9条が検出された。うち、8条は50～60cm間隔で、北西から南東方向に掘削されている耕起痕の方向と同様である。

遺物は少量出土したが細片であり、時期を特定できるものは無い。

2. まとめ S D101の形状や性格については、攪乱の影響が大きく不透明であるが近接する調査区の成果の援用によって遺構の性格を明らかにできる可能性がある。

耕起痕を伴う溝は、時期の特定が困難であるが、当遺跡の広い範囲で検出されており、当遺跡の基本的な遺構面となっている。検出レベルの検討により旧地形を復元できる好資料といえる。

第47次調査

1. 調査の概要 検出された遺構は、溝9条ですべて耕作に伴う溝である。うち8条について、耕起痕がみられた。

S D101～108 幅40～50cm、深さ5～10cmの耕起痕が残る溝状遺構が8条検出された。うち、5条は30～50cm間隔で、いずれも北西から南東方向に掘削されている。他の3条についても掘削方向は同様である。

耕起痕の残存状況は良好で、20～30cm間隔で連続して耕起されている

状況が観察できる。耕起痕の形状は、両端が丸いU字形である。使用された農耕具が、鍬か鋤かは判別できなかったが、南側の斜度が強く北側は緩い。

遺物は少量出土したが細片であり、時期を特定できるものは無い。

2. まとめ 今回の調査区では、耕起痕以外は検出できなかった。遺構面の検出レベルが現地表下約30cmと浅く、後世に削平されているために本来の遺構面が失われているためと考えられる。溝内の堆積土はこれまでの調査成果と同様であり、広い範囲で畑作が行われていたことが確認できる。



fig.121 耕起痕

第48次調査

1. 調査の概要 検出された遺構は、土坑1基と溝1条である。

S X101 直径約60cm、深さ25cmの土坑である。遺物は出土せず、用途は不明である。

溝状遺構 幅約30cm、深さ5cmの溝状遺構である。周辺で検出される耕起痕を伴う溝とは掘削方向が異なる。遺物は出土せず、用途は不明である。

2. まとめ 地山面直上層の暗灰色シルトは、周辺で検出される耕起痕の埋土と同様であるが、遺構の密度は希薄である。地山面は緩やかに東へ傾斜しており、当遺跡の縁辺部にあたると考えられる。

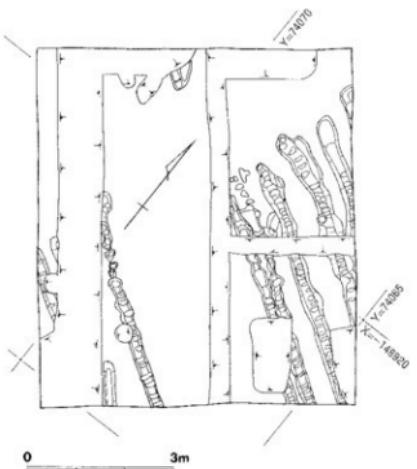


fig.122 47次調査区平面図

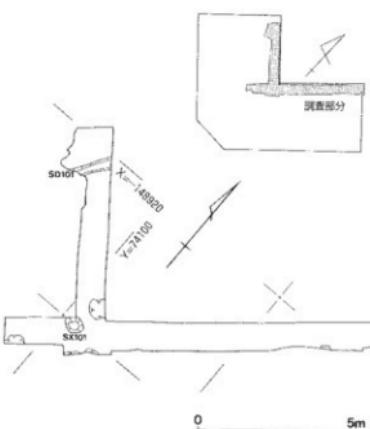


fig.123 48次調査区平面図

第49次調査

- 1. 調査の概要** 検出された遺構は、竪穴住居1棟、土坑2基、溝3条、落ち込み、柱穴、柱列である。
S B01 平成13年度第35~5次調査において検出された竪穴住居の東辺が検出された。内部には、炭化材が散乱する焼失住居である。一辺約5mの方形を呈する。先の調査では6世紀後半の須恵器が出土しているが今回の調査では時期を判明する遺物は伴っていない。
- S D01** 調査区の東壁に沿って、東へと落ちる溝の肩部を検出した。平成14年度の第38~12次調査で確認されたS D01の西肩にあたり、復元すると幅約5m、深さ約90cmの大規模な溝となる。但し、溝幅は、肩部から緩やかに下がった後、中程で幅約1mとなり、底に向けては垂直に、箱掘り状に落ち込む形状となる。断面の形態は漏斗状に近い。
 上層に堆積する黒色シルト層からは、細片となった上器が出土し、中程から下に堆積する灰色シルト層からは個体、あるいは形状のわかる土器の出土が見立つ。先の調査と合わせると、周溝墓の南北方向の溝になるものと思われるが、周辺で検出されている同種の溝の中でも特に規模が大きく、また遺物の出土量も多く、性格を異にするものである可能性も含まれる。
- S D02・03** 調査区の中央で検出した溝で、いずれも幅約30cm、深さ15cm程度である。西側でつながり、S D02がS D03を切るが、存在時期については不明である。
- S K01** 長径1.4m、短径1.2mのやや歪な橢円形を呈する土坑である。最大深度は約30cmで、底部は平たく、また東側が一段浅くなっている。弥生時代中期の壺の底部片などが出土している。
- S K02** 長径1.3m、短径1mの土坑で、形状はS K01に似る。深さは約20cmで、西肩に細片と

なった土器の集中部がある。弥生時代中期のものと思われる。

落ち込み 調査区の北西隅でS X01を、南壁際でS X02を検出した。黒色シルトの浅い堆積である。遺物はS X01でわずかに出土した程度である。周辺の調査から、周溝墓に伴う溝の肩部になるものと思われる。

S X03 調査区の北壁際で長方形の土坑を検出した。長辺2m、短辺1m、深さ約15cmで、内部は長さ1.2m、幅60cmで一段下がる。明確な棺の痕跡はないが、埋土は区別できる。周辺の溝や、溝の肩と考えられる落ち込みの位置からも周溝墓に伴う主体部である可能性が高い。

柱穴 調査区中央で柱穴を18基検出した。このうちS P201～204は建物、あるいは柵列等を構成するものと考えられる。建物の場合、東側に対応する並びが想定されるが、S D01の埋土のため、明確に検出できなかった。これらの柱穴は一辺約40cmの隅丸長方形で、深さは15cm程度である。S P203から遺物が出土しているが、比較的数量はあるものの、小片のため時期は不明である。

2. まとめ 今回の調査では、周辺で確認されていた遺構の続きの部分が検出でき、各々の遺構の規模が明らかになった。

特に、今回のS D01における遺物の出土状況は、溝底で土器が単体で出土するという、先の調査で確認された周溝墓に伴う供献土器の出土状況とはやや様相を異にしており、多量の土器を含む大規模な溝であったことが判明した。今後の周辺での調査の進展によって、溝の形態やその用途など、周溝墓の在り方にについて考える材料が見つかるものと思われる。



fig.124
49次
調査区全景

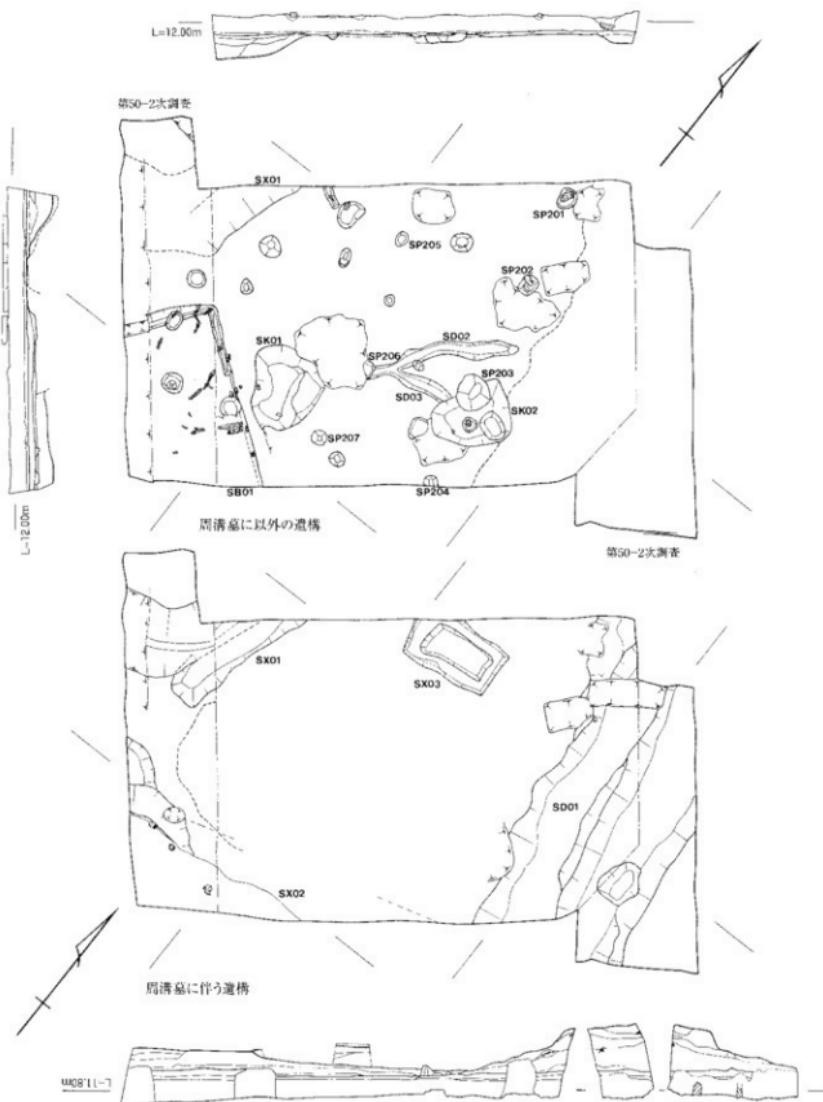


fig.125 49次調査区平面図・断面図

第51次調査

1. 調査の概要

調査区は北から南、東から西に傾斜した地形に位置する。

基本層序は、上層より淡黄褐色砂混じり砂質土（床土）、淡灰色砂混じり砂質土（耕土）、淡灰黄色砂質土（遺構面）、黄灰色極細砂シルトとなっている。I区西～II区にかけて粗砂混じり砂質土が遺構面のベースになっている部分も見受けられた。遺構面は標高11m付近である。

周溝墓に伴う溝1条と耕作による鋤溝等を検出した。

SD01

周溝墓のコーナーにあたると考えられる溝である。擾乱により削平されているが、L字状を呈する。この付近では方形周溝墓が多く検出されていることから、底面が方形周溝墓の特徴を有していないものの、周溝の一部であると考えられる。

埋土は上層から暗紅褐色石混じり砂質土、暗灰色石混じり砂質土、淡灰黄色石混じり砂質土となっている。遺物は第2層目の暗灰色石混じり砂質土からの出土が多い。

鋤溝

東西、南北の2方向に鋤溝状の溝が数条検出された。これらの溝の多くは底面に鋤の痕跡が明瞭に認められる。埋土はいずれも暗灰色極細砂シルトで、周溝墓を切っている。遺物はほとんど出土していない。

2. まとめ

これまで実施されている街路部分の調査等で、調査区付近は方形周溝墓が多く検出されている。新たに見つかった周溝は、周溝墓が密集する部分の西端付近に当たると考えられる。時期の詳細については、遺物整理の後、改めて言及したい。

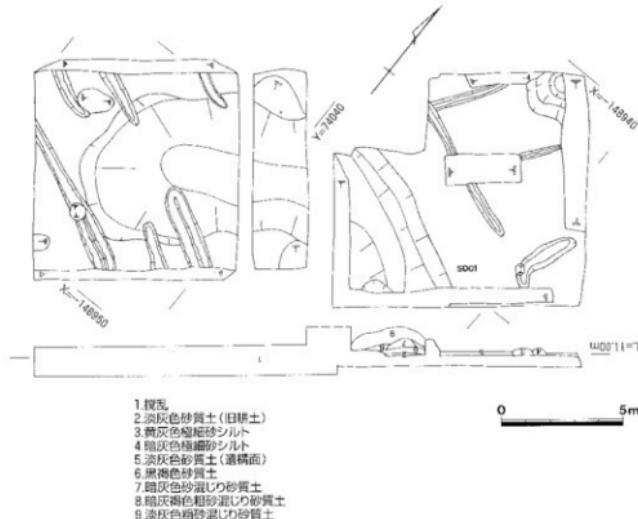


fig.126
51次調査区
平面図・断面図

第52次調査

1. 調査の概要

SD01

検出された遺構は、溝1条、土坑2基である。

幅約1m、深さ約40cmを測る。なお溝幅については、部分的に残る肩部の痕跡から、削平前は約2m前後まで広がっていた可能性があり、浅い漏斗状の断面形態になっていたものと思われる。

溝は北側に緩やかに弧を描き、調査区内は周溝墓の南東隅部にあたるものと考えられる。底部の溝底は、周囲よりやや深くなった土坑状を呈しており、この部分の溝の堆積土中層より弥生時代中期中葉の壺が1点出土した。壺は胴部と頸部が分離している。破碎されたものではないが、溝内に据えられたものか、あるいはマウンド上から流れ込んだものかは不明である。

土坑

その他、溝の肩部から溝を切り込む土坑を2基検出したが、弥生土器片と思われる小片が出土したのみであり、詳細は不明である。

2. まとめ

今回の調査では、既存の建物基礎により遺構面の残りが悪かったが、周溝墓の一角が検出された。東側に続く街路部分の調査（第50-1次）でも溝が検出されているが、新しい溝と切り合い関係にあるため、形状の把握が困難ではあるが、溝底部の曲線の形状からある程度の復元は可能であろう。供獻された壺に穿孔などは認められず、また層位的に埋土の中層からの出土という状況について、いつの段階で、どのように土器が供獻されるのか、また周溝墓の溝の埋没過程などについては、周辺の調査やその際の土器の出土状況などを合わせて考察が必要となろう。



fig.127 S D01内遺物出土状況

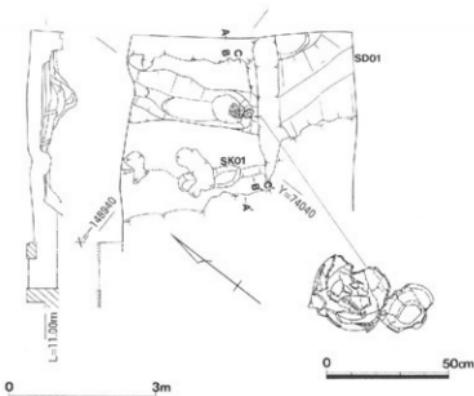


fig.128 52次調査区平面図・断面図

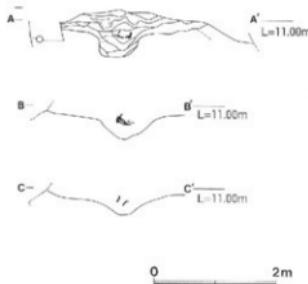


fig.129 S D01断面図

第53次調査

1. 調査の概要 周溝墓に伴う溝4条、掘立柱建物1棟、柱穴などが検出された。

S D01 大部分が搅乱を受けるが、溝の端部が検出された。検出長約3m、ここでの幅は約1.3m、深さ約30cmで、北側に深くなる。遺物は出土していない。

S D02 東西方向の溝である。西隣地での街路部分の調査（第50-6次）で溝の西端が見つかっており長さは約8mになる。幅は最大で2.5m、深さは約60cmを測る。上層の黒色シルト層からの遺物は少なく、上器は中間に堆積する同じく黒色シルト層の直上から層中に集中する。破片はやや大きいものの、破損しており、原位置を保った状態ではない。西端検出の甕は細片ではあるが、一個体復元可能な状態である。上器の上に拳大よりやや小さい縁があり、この場で割られた可能性がある。土器はいずれも弥生時代中期中葉のものである。

S D03 調査区南東部で検出した。大部分が調査区外に広がるため、規模については明らかではないが、S D02と同様の規模を持つものであろう。

S D04 調査区東辺中央で検出した溝で、東側に続く。遺物は出土していない。

これらの溝は各々が独立しており、端部は接するもののつながった状態ではない。いわゆる陸橋部をもつ周溝墓である。接点部=陸橋部上は土壤化の度合いが顕著であるが、溝の端部の埋土にあたる可能性は低いと思われる。

柱穴 調査区北隅で柱の並びを確認した。調査区内では2間×2間分が検出されたが、各々の間隔は60cmと狭い。柱穴の規模は、径約40cm、深さ約30cmである。S P04から遺物が出土したが、詳細な時期は不明である。この他に柱穴が、周辺の調査地に比べ多く検出できたが、規模は概して小さく、また出土遺物もほとんどない。

2. まとめ 今回の調査では、調査区の中央で東西方向の溝が確認され、溝を共有する南北2基の周溝墓が確認できた。並行する東西方向の溝が未検出であり、現時点で全体の規模は明らかでないが、先の街路部の調査で検出した南北方向の溝（第50-6次：S X02）と合わせると、一辺約7~8m前後を測る周溝墓となるだろうか。多くの場合、主体部もその痕跡が失われており、周溝墓の規模、それに伴う主体部の配置や大きさなど不明な部分が多いが、当地域の周溝墓の在り方を考える上でデータの蓄積が図られたと考える。

fig.130
S D02
平面図・断面図

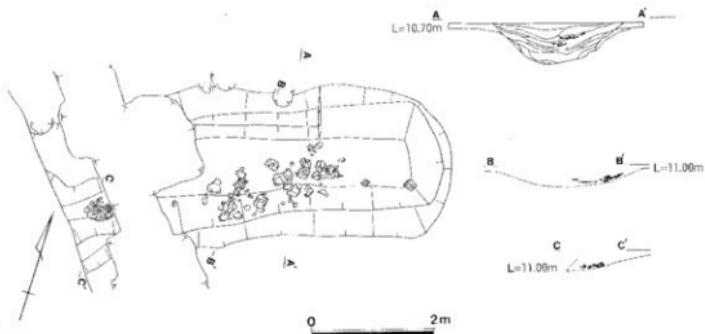




fig.131
53次
調査区全景



fig.132
53次調査区
平面図・断面図

第54次調査

1. 調査の概要

周溝

検出された遺構は、方形周溝墓に伴う周溝と溝1条である。

調査区の南隅において検出した幅約1.2m、深さ40cmほどの溝状遺構であり、ほぼ東西方向に掘削されている。

溝

周溝墓の北側で検出した幅約1.7m、深さ20cmほどの南北方向の溝と考えられ、弥生時代中期の壺が1個体分出土した。

2. ま と め

今回の調査は、極めて狭い面積の調査であったため、遺構の全体像を把握することができなかった。しかし、方形周溝墓に伴う周溝の一部が確認され、一帯に広がる方形周溝墓群の構造を知るための資料を得ることができた。

第55次調査

1. 調査の概要

周溝

調査範囲のうち東半分は既存の建物の基礎によって大きく削平されており、西側において浅い土坑2基と方形周溝墓に伴う溝を検出した。

幅約2m、深さ30~50cmほどの溝状遺構であり、北側3分の1ほどの所で、いったん途切れている。溝内からは、長頸壺を中心とした遺物が点々と間隔をおいて出土した。

4は途切れた溝の北側の落ち込み内から出土した壺で、口径21.6cm、器高34.8cmを測る。底部片は見つかっておらず、底は抜かれていた可能性がある。頸部に2条の断面三角形の突帯を貼り付け、体部には櫛描直線文、斜格子文、波状文を施す。また垂下した口縁の上端に肩状文を廻らす。体部下半や口縁部の内面には丁寧なヘラ磨きが認められる。1は南側の溝の北端で見つかった近江系の

壺の口縁である。チョコレート色を呈し、端部を上方に摘み上げた受口状口縁の内面はヨコハケ、外面には刻目を施す。2・3は溝の中央で出土した長頸壺である。2の口縁には抉りが入り、頸部に2条の櫛描波状文、体部に10条1単位の直線文を4本廻らす。3も頸部に櫛描波状文、体部に直線文を施し、一部では施文の上からも丁寧なナデを施す。共に器高40cm弱、胴部最大径約24cmを測る。他に壺の体部片などが出土しており、7~8個体の土器が供献されたものと考えられる。いずれも弥生時代中期後半に属するものである。

土坑

西側の調査において検出された遺

構に統くもので弥生時代中期の遺



fig.133 54次調査区平面図

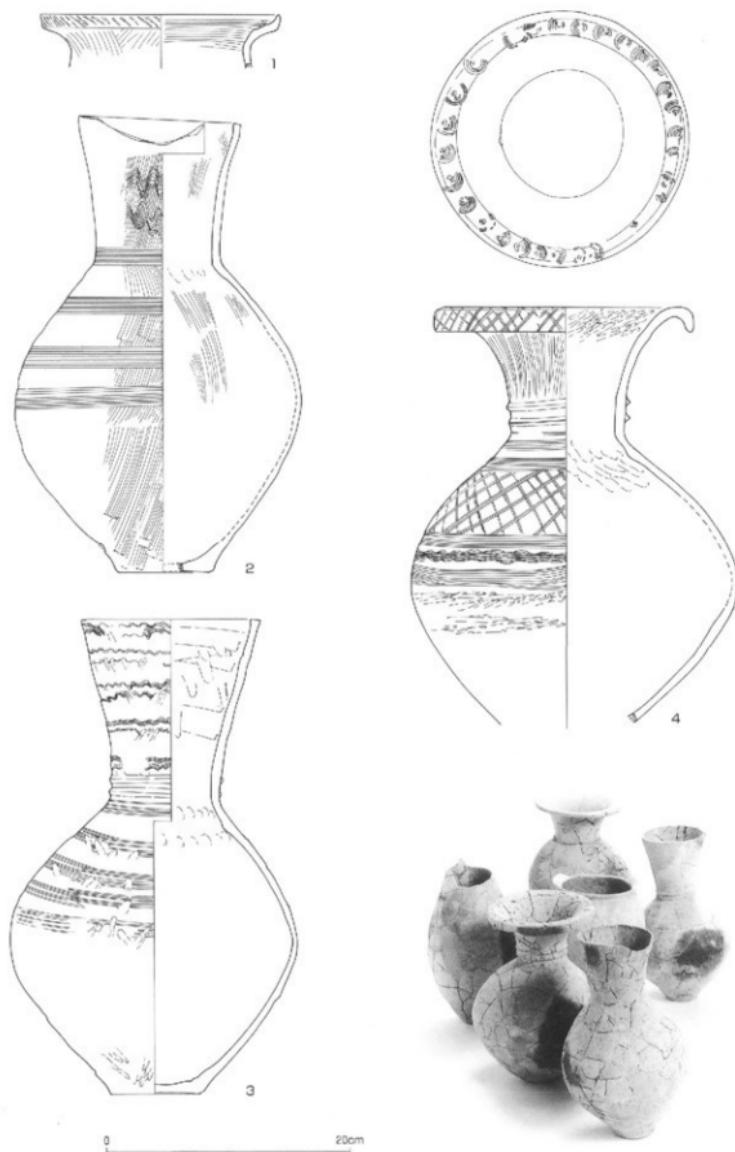


fig.134 54次調査出土遺物実測図

fig.135 54次調査出土遺物

物が出土している。

2. ま と め 調査区の約半分が削平をうけたものの、今回の調査においても、方形周溝墓に伴う周溝の一部が確認された。一帯にはかなりの密度で方形周溝墓群が存在し構造を知るための資料を得ることができた。

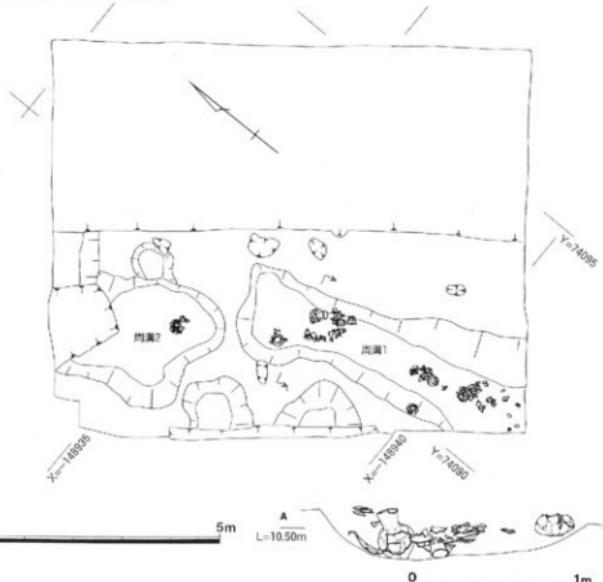


fig.136
55次
調査区平面図・
周溝1立面図



fig.137 周溝1



fig.138 55次調査区全景

19. 太山寺遺跡

1. はじめに

太山寺遺跡は、明石川の支流、伊川によって形成された細長い伊川谷の奥處に位置する。太山寺は、多くの重要文化財を所蔵している天台寺院で、中でも本堂は鎌倉時代に建築され、国宝に指定されている。太山寺は、蓋亀2年(716)創建と伝えられた天延元年(973)の縁起があるが、定かではなく、承元3年(1209)、弘安8年(1285)に火災がおこったという文書や、伽藍配置等からは、12世紀初期の建立と考えられている。

調査地である歓喜院は、もと理性院であったことが元禄期の『播州太山寺伽藍之図』よりわかつており、歓喜院は安永6年(1777)に現在の場所へ移ったことが判明している。

これまでに行われた周辺の発掘調査からは、平安時代後期(12世紀代)～江戸時代の土器・瓦等が出土している。



2. 調査の概要

今回の調査は、太山寺本堂の北西250mに位置する歓喜院再建のために実施した発掘調査である。

基本層序

調査区は北東から南西に緩やかに傾斜している。上層より、搅乱・盛上、淡褐色炭混じり砂質土、黄白色粘質土(遺構面)となっている。S X01は淡褐色炭混じり砂質土層より切り込んでいるため、他の検出遺構よりも新しいものと考えられる。

S D01

調査区の東を南北に流れる。幅1.0～2.2m、深さ0.3mを測る。埋土は淡灰茶色砂質土、炭化層、淡灰色砂質土で、特に上層で人頭大の礫が多く含まれている。土師器、陶器、瓦が出土している。室町時代と考えられる。

S D09

調査区の北西で検出した南北方向の溝である。幅0.4～0.7m、深さ0.1～0.3mを測り、断面はU字状を呈する。埋土は暗灰色石混じり砂質土で、土師器、須恵器、瓦がやまとまって出土している。

S K01

調査区の北東で検出した。直径0.7m、深さ0.2mを測るやや不定形な形状を呈する土坑

である。底面より少し浮いた状態で拳人の石が敷き詰められた状態で検出した。掘立柱建物の柱を支えるためのものと考えられる。

S K08 調査区の南東で検出した。長径0.9m、短径0.7m、深さ0.3mを測る梢円形を呈する土坑である。S K01同様、拳人の石が底面より少し浮いた状態で検出した。

S K15 調査区の東で検出した。直径1.3m、深さ0.8mを測る。人頭大の礫が側面にやや並んだように検出されたことから、井戸が廃絶したものである可能性も考えられる。底面では湧水を確認している。

ピット 調査区の北側では多数のピットを検出した。造構面が削平されている可能性も考えられるが、浅いものは0.1m、深いものでは0.4mを測る。直径は0.2~0.4m、柱痕が残存しているピットは確認できていない。炭や籠を埋土に含むものもあり、また柱穴の底面で礫然として人頭大の平らな石を掘り置くものも確認できた。

遺物は細片であるものの、鎌倉時代~室町時代の土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦が出土している。遺物の整理が進んだ段階で、掘立柱建物の妥当性を判断したい。

S X01 調査区の南西で検出した。影響深度の関係上、掘削は一部にとどまっている。地形的に北から南へと傾斜しているため、一層多く堆積した溜りの様な状態であったと考えられる。S X01の落ち際は、人工的なものか否かの判断は難しいが、埋土に礫・石が多い。土師器、陶器、瓦が出土している。室町時代以降と考えられる。

トレンチ部分 調査区から南西側に3ヵ所ある。いずれも一抱え程度の石が表土上にあり、歡喜院の礫石であることが柱の痕跡から判明している。堆積状況を確認する上で、断ち割りをおこなったところ、石はすべて盛土内におさまっている。

3. まとめ 今回の調査は、工事影響深度の関係上、すべての遺構を掘削することはできなかったが、多数の土坑・ピット等を検出した。これまで、太山寺建立の時期と近い造構はほとんど確認されていなかったので、鎌倉時代の造構を検出した意味は大きい。ただし、遺構・遺物から寺院関係の造構と特定できるものではなく、直接には結びつかない可能性が高い。



fig.140
調査区
平面図・断面図

20. 水谷遺跡 第10次調査

1. はじめに

水谷遺跡は、神戸市西区を流れる明石川の支流である樅谷川と伊川に挟まれた段丘上に位置する。当遺跡は、平成3年度に水谷地区の特定土地区画整理事業に伴い、発掘調査が行われ、平安時代末期頃の掘立柱建物や中世の溝等が確認された。以後、数次にわたる調査によって、古墳時代初頭～中世にわたっての遺構・遺物が発見された。

これらの中で特に注目されるのは、古墳時代中期末～後期初めの古墳群である。平成8年度に発掘調査された、水谷大東古墳はその中の代表的な古墳で、南西に造り出し部を有する全長約20mの帆立貝形を呈する。墳丘は削平され周溝のみが残存しているが、その外側の一部に円筒埴輪の基部が列をなして残っていた。円筒埴輪の他に、鶏形、人物、盾形の埴輪が、破片の状態で出土した。平成10年度の第7次調査においても、方墳の周溝の可能性が高い溝が確認され、円筒、馬形、盾形、鞍形埴輪片および土器片が出土した。

今回の調査地は、第7次調査の南西に20mほど離れた、都市計画道路出合新方線建設工事予定部分で、試掘調査の結果、古墳の周溝らしき遺構が発見されたため、発掘調査を実施することとなった。

なお本調査の詳細な成果については、平成17年3月刊行の『水谷遺跡 第10次調査 馬掛原遺跡 第1次調査』を参照いただきたい。



fig.141
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査では、古墳3基（3～5号墳）、中・近世の溝2条を確認した。

古墳の墳丘はすべて削平されて、周溝しか残っていない。また調査範囲内では2分の1～3分の1程度の検出に止まるため墳形は確定できないが、3号墳は直径10m、周溝の幅2～4mの円墳、4号墳は一辺8m、周溝の幅2～2.5mの方墳、5号墳は8.5m×6.5m、周溝の幅15m前後の方墳と推定される。

また、埋葬施設も削平されており明らかでないが、木棺直葬の可能性が高い。周溝内か

らは、須恵器と若干の埴輪、土師器が出土しているが、これらの年代はおよそ5世紀後半～末頃のものと判断される。

3. ま と め 今回の調査で確認された古墳は、これまで付近で発見された水谷大東古墳や、水谷2号墳などとほぼ同時期であり、周辺には同時期の古墳が、未発見の状態で他にも存在するものと推定される。これまでの調査状況から推察して、おそらく付近には、十基以上の古墳がまとまって造られていたのであろう。これらの古墳の被葬者は明らかでないが、これらの古墳の平面的規模や墳形、埴輪の有無等に差異が認められることから、葬られた人たちの間に階層差があったことは明らかである。今のところこの地域の有力者と、その人物に従属する小集団の長というべき人物の墳墓と、推測するのが妥当であると思われる。



fig.142
調査区全景

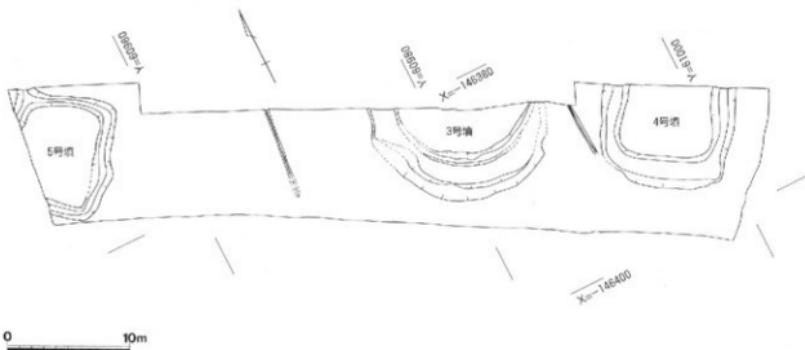


fig.143 調査区平面図

21. 馬掛原遺跡 第1次調査

1. はじめに

今回の調査地は、神戸市西区玉津町高津橋に所在する。南東からのびる丘陵端部に位置し、北側は櫛谷川の支流、天上川によって深く削られた谷に面する。調査地付近の現標高は約39mで、丘陵先端は南西に下がり、調査地付近まで小さな谷が入り込む。

この丘陵上には前期古墳の白水郷塚古墳が築かれ、丘陵の南側には、区画整理に伴う調査の結果、弥生時代後期～平安時代後期の多くの遺構・遺物が確認された白水遺跡が立地する。また櫛谷川と伊川の合流部には、弥生時代を通じてこの地の拠点的集落となる新方遺跡が立地し、その他付近には、弥生時代から中世まで営まれた多くの遺跡が確認されている。

今回の調査は、都市計画道路築造に先立ち試掘調査を実施したところ、弥生時代と考えられる上器片と溝状の遺構を検出した。このため工事範囲内、既に水田時の造成等により地形の変更が広く及び、遺構面が削平されていた部分を除いた部分について発掘調査を実施した。なお当遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地外であったため付近の小字名を冠して「馬掛原遺跡」とした。



fig.144
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査では、溝（溝状遺構）、土坑、柱穴、掘立柱建物、柵列をはじめとする遺構を検出した。

溝状遺構

溝状遺構については、直線的な溝の他に平面形がL字状を呈するものや折れ部を持つ不定形なものがあり、方形の区画を形成する一群が存在する（S D01～04・S X04・05）。

これらは「周溝墓」または「台状墓」状遺構に伴うものと考えられる。時期については、S D01・03・04より少量であるが出土した遺物から、弥生時代後期後半～末期の所産と考えられる。

柱穴

柱穴は、調査区全体で約100基が検出され、建物2棟、柵列1条が復元できた。

うち、SB01は、弥生時代の建物で調査区内で東西、南北各1間分が確認された、SB02および柵列SA01については、時期不明である。

3. まとめ 今回の調査地は、比較的幅広の丘陵端部に位置するものの、後世の耕地造成や耕作に伴う地形改変が大きく、旧地形をほとんど留めていないものと考えられる。このため遺構・遺物の残存状況は非常に悪く、遺構の大半が削平を受けた状態で検出された。

その中で方形の「区画墓」2~3基が検出された。これらは弥生時代後期後半~末期にかけて丘陵上に築造された墳墓群と想定される。弥生時代~古墳時代にかけての当地域における造墓活動を考える上ではもちろん、当地域の聚落形成、支配者層の動向を考える上でも重要な成果であろう。



fig.145 調査区全景



fig.146 周溝墓

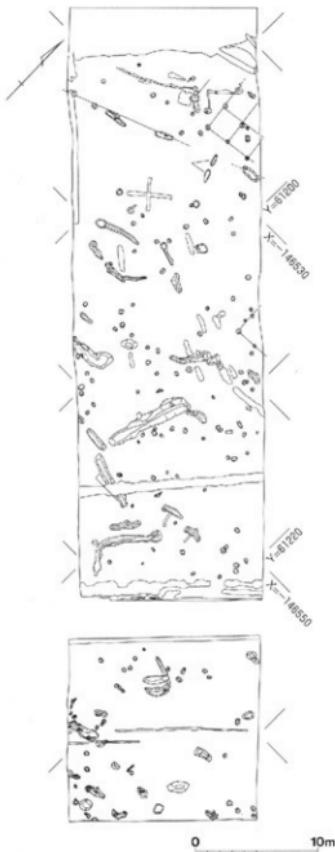


fig.147 調査区平面図

22. 慶明宮山遺跡 第1次調査

1. はじめに

慶明宮山遺跡は、明石川東岸と櫛谷川西岸に挟まれた三角地帯に位置している。

地形的には、明石川に形成された沖積低地から丘陵上に拡がることが、想定される遺跡である。

今回、個人住宅の建設に先立つ試掘調査によって弥生土器片が確認されたことから、新たに確認された遺跡である。



fig.148
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、建物の基礎に搅乱される範囲についてのみ実施した。

基本層序 基本層序は、耕土、淡黄灰褐色砂質土（上面が遺構面＝地山）となる。遺物包含層は存在しない。

遺構と遺物 遺物は、古墳時代後期の須恵器と土師器が、遺構面直上から小片で少量出土している。遺構面からは、時期不明の土坑が検出されている。

S K01 調査区の南側で検出された。幅約50cm×60cm以上で深さ約25cmを測る、不整円形の土坑である。上層に灰褐色砂質土が体積し、下層には淡黄灰褐色砂質土が体積している。古墳時代後期の須恵器が細片で出土しているが極めて僅かであり、遺構の正確な時期は不明である。

S K02 調査区の南側で検出された。幅約50cmで深さ約21cmを測る、不整円形の土坑である。上層に灰褐色砂質土が体積し、下層には淡黄灰褐色砂質土が堆積している。遺物は出土していない。

3. まとめ 慶明宮山遺跡の調査は、今回が初めてである。調査地は丘陵上に位置しており、土壤は流出して堆積しにくい場所である。また耕地の開墾でも削平を受けており、その結果、耕

土直下が地山の遺構面となっている。

極めて限定された部分の調査であったが、成果としては古墳時代後期の須恵器と土師器が確認されたことが挙げられる。今回の調査では確実な遺構は確認されていないが、周囲に当該時期の遺構が存在する可能性も考えられる。また試振調査時には、弥生土器片が確認されており、この時期の遺構の存在も予想される。

今後の調査により、この遺跡の状況も序々に明らかになると思われる。

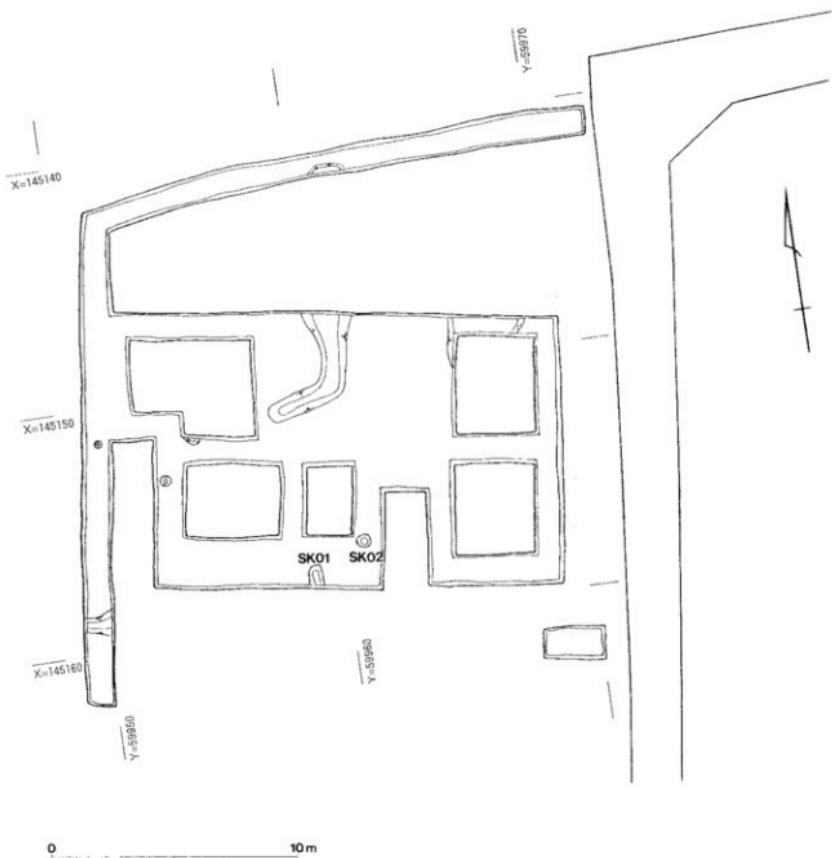


fig.149 調査区平面図

23. 出合遺跡

1. はじめに

出合遺跡は明石川下流域の右岸の標高12~15mの沖積地と台地上にひろがる弥生時代~中世の複合遺跡である。過去の調査において多くの遺構が確認され遺物も出土しており、弥生時代中期の周溝墓、古墳時代中期~後期の竪穴住居、帆立貝式古墳、奈良時代~鎌倉時代の掘立柱建物などが確認されている。



fig.150
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、住宅建設に伴うもので工事により埋蔵文化財に影響の及ぼす範囲について発掘調査を実施した。今回の調査地の標高は約16mになる。

基本層序

層序は、上層より盛土、耕土、旧耕土である灰色砂質土、遺物包含層である褐灰色粘質土となり、遺構面である黄灰色細砂質シルトとなる。

検出遺構

遺構面は一面のみ確認した。現地表面から約90cmの深さの遺構面において検出した遺構は、古墳時代中期の竪穴住居1棟、鎌倉時代の柱穴十数基、近世の井戸3基である。

S B01

調査区の北西隅で検出した方形の竪穴住居である。遺構面からの深さは約30cmで、一辺4.4m以上であるが、調査区外に広がるため全体規模は判らない。内部には肩壁溝をもち、古墳時代中期の土師器の高环が出土している。なお、調査区の南西隅で竪穴住居のような立ち上がりをもつ遺構を検出しているが、一部しか検出してないため、断定はできない。

ピット

直径20~30cmの柱穴・ピットを多数検出したが、建物としてまとまらなかった。断ち割りをした結果、数基のピットから鎌倉時代頃の須恵器が出土している。柱穴のうち深いものは約50cmあり、木質痕がみられるものもあった。

S E01~03

S E01は、調査区の中央で検出された井戸である。直径1.3m、深さ40cmを測り、近世の遺物が出土している。S E02・03は、調査区中央の南側で並んで検出された井戸である。S E02は、長径が1.7m、深さ約65cmである。内部には竹の籠の一部が残っていた。これらの井戸はいずれも湧水層まで掘削されてなく、水溜め遺構の状況を呈している。

3. まとめ 今回の調査では、同一面で古墳時代中期・中世・近世の遺構を検出した。この地域での調査はあまり実施されていなく、わからない部分があったが、古墳時代の竪穴住居を検出したことは、この一帯が当時の集落域である可能性が窺われた。今後、周囲の調査が行われれば、この地域における遺跡の性格が明確になると思われる。



fig.151
調査区全景

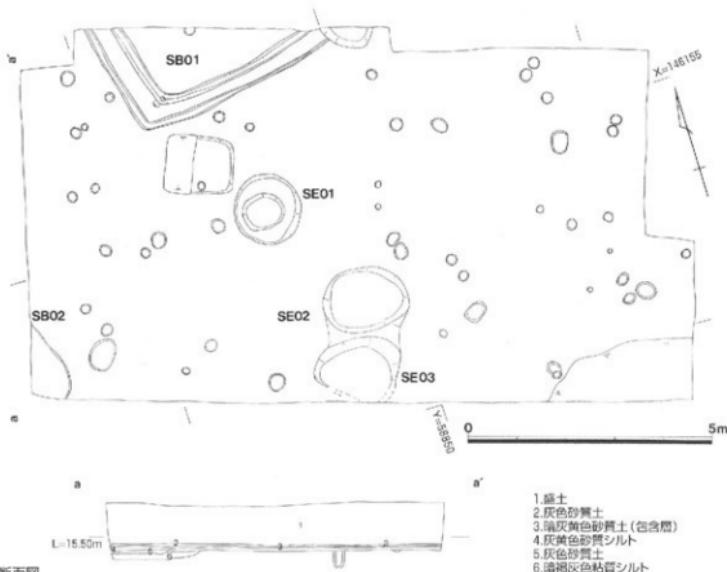


fig.152
調査区
平面図・断面図

24. 細田遺跡 第1次調査

1. はじめに

細田遺跡は、明石川に開析される神出丘陵の末端、明石川右岸に立地する。対岸の丘陵、元住吉山には縄文時代後期後半、および弥生時代中期の遺構・遺物が確認されている元住吉山遺跡が存在する。ここから出土した縄文土器は元住吉山式土器として、この時期の縄文土器の標識となる。一方、細田遺跡は弥生時代後期の遺物が出土した遺跡として認識されているが、これまで発掘調査が行われたことがなく、その実態は不明であった。背後の丘陵上には古代から中世にかけての大窯業遺跡である神出古窯址群が存在する。

遺跡内には永禄二（1559）年にこの元住吉山から遷座したと伝えられる住吉神社が所在する。天正七（1579）年に兵火に焼かれたものを正保四（1647）年に再建したものが現在の社殿であると伝えられる。

今回の調査地点は現状の明石川から250m離れた地点にあり、圃場整備により現況まで広げられた田園の谷側法面およびそれに近い部分にあたる。



fig.153
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

圃場整備以前の水田層以下で、中世1面と奈良時代1面、計2面の遺構面を検出・調査した。以下概要について記述する。

第1トレントでは棚田が検出された。3a層が耕土になる。第2トレントではSD02が検出された。两者を覆う2a～4層灰黄褐色粘土交じり砂礫は土石流と思われるが、遺物の出土がなく、その埋没時期を判断できない。ただしSD02が掘り込まれるベースとなる4a層からは平安時代末ころの遺物が出土しており、第1遺構面はそれ以降、中世の水田であると推測される。

水田

土石流によって埋没する棚田である。等高線に沿う南北方向に長辺の主軸をもつ。西側上段の水田面は圃場整備以前の水田面と同一面である。あるいはこれにより下げられているため確認できないが、同一であればその比高は約30cm。東側下段の水田面も圃場整備以

前の水田の段によりカットされているが、この段が第1造構面の段とほぼ対応しているとすれば、この棚田は上下幅約1.5m、横幅4m以上の等高線に沿った細長いものとなる。

S D02 南南西方向にのびる溝で残りのよい部分で幅約2m、造構確認面からの深さ約45cmを有する。埋土は土石流で遺物なし。S D02の西山側には水田土壤が残る。

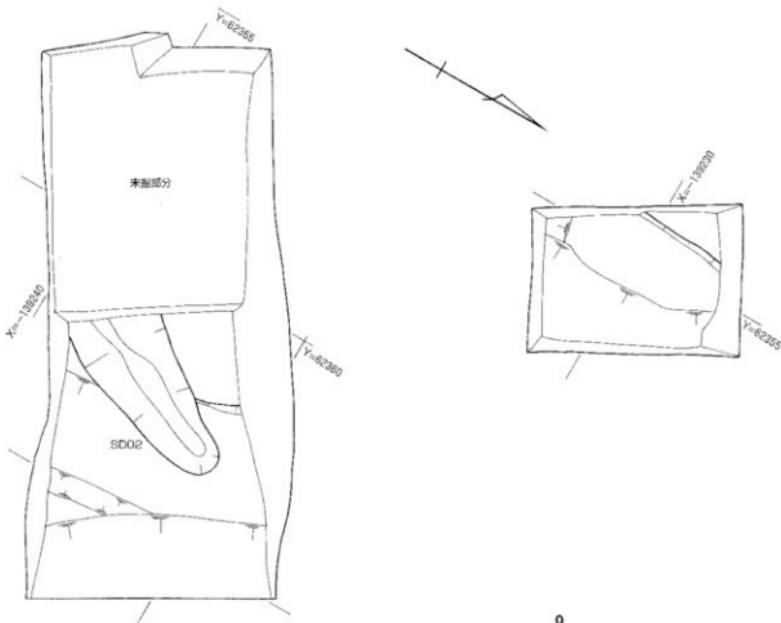
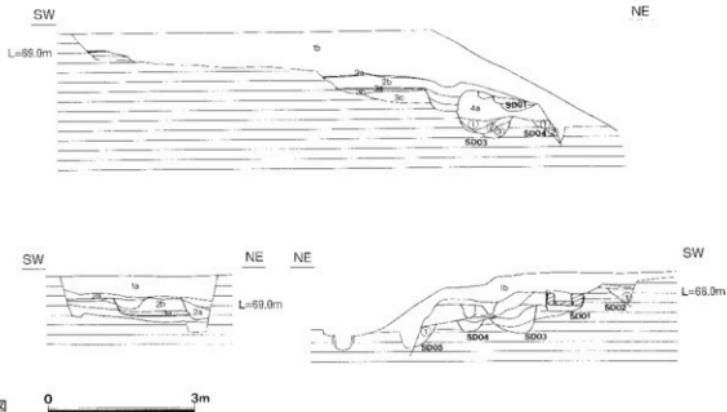




fig.156 第1遺構面全景



fig.157 第2遺構面全景

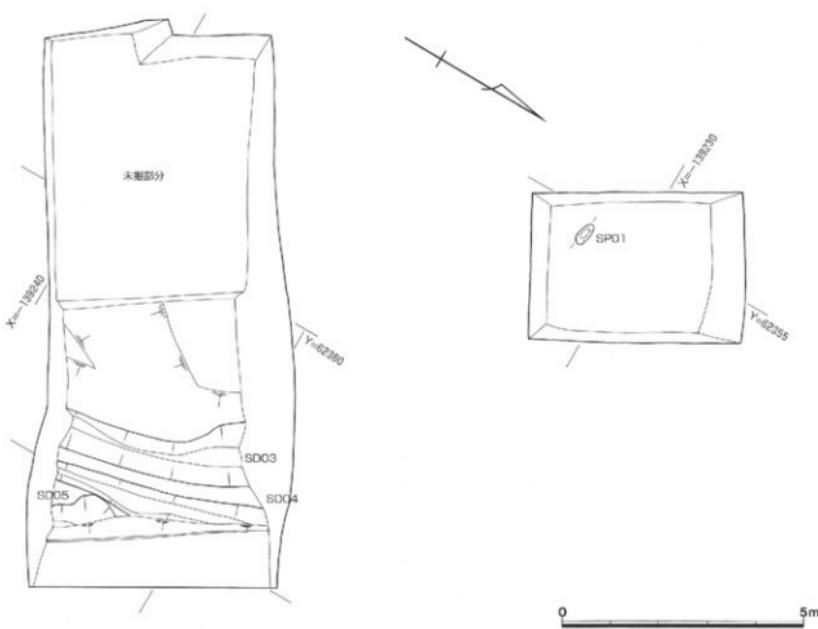


fig.158 第2遺構面平面図

第2遺構面 弥生時代後期から平安時代末までの遺物を包含する4a層の下面で検出した遺構面。第1トレンチで小穴（S P01）、第2トレンチで溝3（SD03～SD05）が検出された。

SD03・04 ゆるく弧を描き併行して南北方向にのびる溝である。SD03は幅約1m、遺構確認面からの深さ約60cm、SD04は幅約60cm、遺構確認面からの深さ約30cmをはかる。両者の深さに違いがあるが、斜面地であり底面の標高はほぼ同一である。奈良時代までの遺物が出土している。

SD05 SD04の東にある遺構で大きく攪乱を受け、ごく一部しか残らないため、溝かどうかも明らかでない。確認できる部分で幅約50cm以上、遺構確認面からの深さ50cm以上をはかる。底面のレベルはSD03・04より約30cm深い。奈良時代までの遺物が出土している。

3.まとめ 小面積、また丘陵縁辺という限られた条件の中での発掘であったが、細田遺跡における初めての調査によって、これまでその実態が不明であったこの遺跡の内容について、そのごく一部ではあるが明らかにすることができた。

確認された遺構は水田と溝程度にとどまるが、出土した遺物には、弥生時代・奈良時代・平安時代・中世・近代のものがあり、この地に継続的に人々の生活の営まれていることが確認された。

今回の調査を行うに先立って行われた試掘調査においては、第2トレンチの西約10mの地点で径50cmほどの柱穴が確認されており、また今回の調査で出土した遺物の量は耕地としてはやや多いものがあり、近接して居住域の存在を想定できるだろう。かつて調査地の周辺で行われた工事の際にもかなりの上器が出上したという情報も得られ、近隣には住吉神社も鎮座している。当地にはある程度の規模を持つムラが継続的に存在した可能性が推測される。

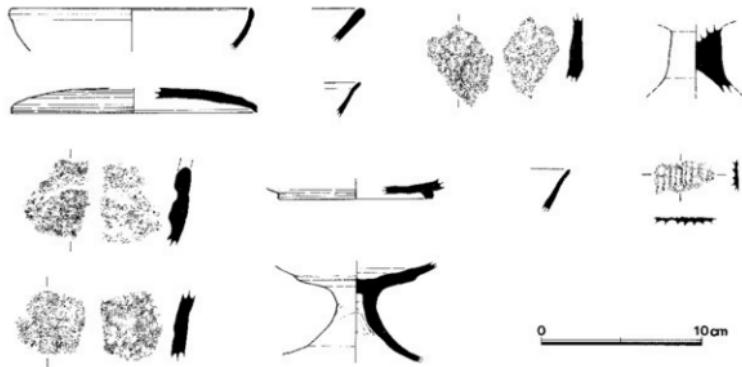


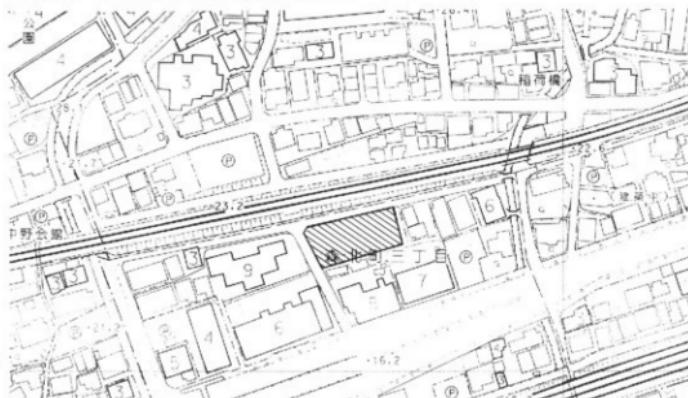
fig.159 出土遺物実測図

III. 平成15年度の通常事業に伴う発掘調査

1. 森北町遺跡 第20次調査

1. はじめに

森北町遺跡は、六甲山南麓の丘陵裾部に位置する遺跡である。これまでの調査から、弥生時代、古墳時代、飛鳥時代、鎌倉時代と長期にわたって、集落が形成されている遺跡であることが明らかになっている。特に古墳時代においては、前漢鏡片や韓式系土器が出土するなど、この地域では最も先進的な集落であったといえる。



2. 調査の概要

基本層序

調査区は北から南に傾斜し、西から東にも若干傾斜している。東壁での層位は上層より盛土・擾乱層の下、0.5~0.7mの耕土・床土層をはさんで、淡褐色灰色石混り砂質土（包含層）、褐灰色粘性砂質土（遺構面）となる。調査区の東部では包含層からの遺物が少なく、遺構も希薄であった。調査区の南壁での層位は、耕土・床土層が何層にもわたり厚く堆積している。

検出遺構

検出した遺構は、掘立柱建物、ピット、溝、土坑、落ち込みなどがある。

掘立柱建物 調査区の西部では、柱穴がまとまって検出され、総柱建物5棟、側柱建物4棟の合計9棟の掘立柱建物が確認できた。柱穴は直径0.2~0.6m、深さは深いもので0.6mを測る。

掘立柱建物は切り合い関係にあるため、少なくとも4時期の時期差が考えられ、2間×3間の南北棟が2棟と、東西棟は、3間×2間が4棟、2間×1間が1棟、4間×1間以上が1棟および2×2間が1棟である。柱間は、芯々でほぼ1.8~2.2mの範囲に収まる。建物は座標北より、西へ振っているものがほとんどであった。概ね12世紀後半~13世紀中頃の範疇に収まる時期と考えられる。

溝

調査区の東半分では、遺構が希薄であったものの、溝を数条検出した。深さはいずれも0.2m程度で、遺物はあまり含んでいない。柱穴より時期の遅るものと考えられる。

S R01は他の溝と異なり、深さは深いところで0.5mを測る。埋土は粗砂や細砂で、古墳時代前期と考えられる土師器の高环が摩滅した状態で出土している。

3. まとめ 今回の調査では、12世紀後半～13世紀中頃の掘立柱建物が9棟検出された。これまでの森北町遺跡の調査においては、同時期の遺構があまり検出されていなかったが、この時期の集落も営まれていることが明らかとなった。これは、過去に実施してきた調査の多くが、標高20m付近では実施されていなかったことと関係すると考えられる。つまり中世の遺構は現在の阪急神戸線より南側に存在する緩斜面に広がると言えられよう。

なお本調査の詳細な成果については、平成17年3月刊行の『森北町遺跡第20次調査 発掘調査報告書』を参照いただきたい。



fig.161
調査区全景

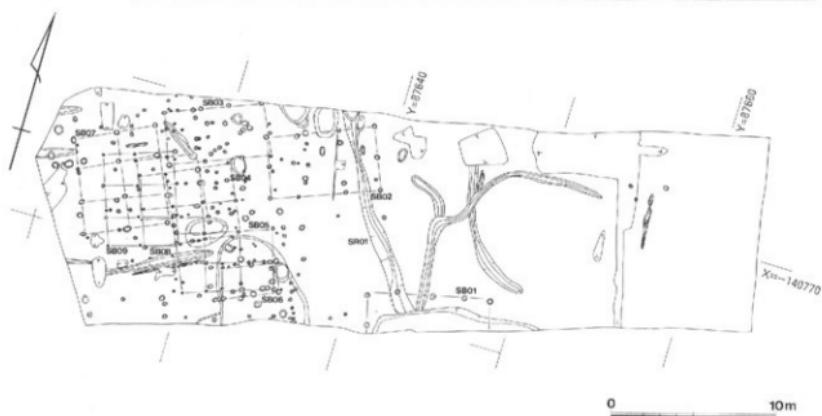


fig.162 調査区平面図

2. 住吉宮町遺跡 第38次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は、六甲山南麓を流れる住吉川の右岸の扇状地に位置する。これまでの調査から、幾層もの洪水砂層などが確認されており、河川が幾度となく氾濫していたことが伺える。

この遺跡からは、弥生時代後期末、古墳時代中期、奈良・平安時代の3時期を中心とした住居址が多く見つかっている。また、古墳時代中期の古墳も多い。古墳のほとんどは低墳丘をもつ方墳であるが、帆立貝式古墳・箱式石棺墓も確認されている。

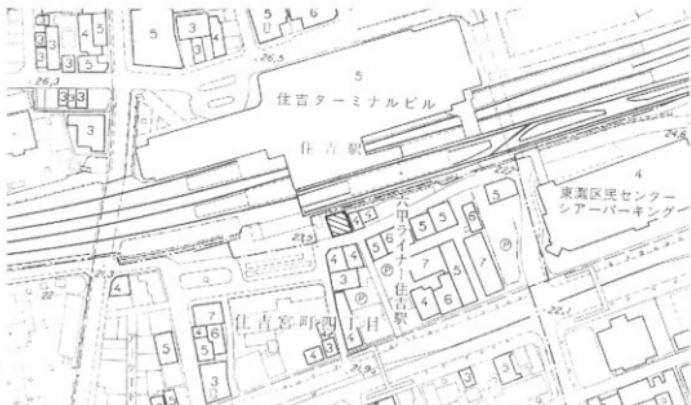


fig.163
調査地位置図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、中世・古墳時代・弥生時代がある遺構面のうち、中世の遺構面は調査地内すべて調査を実施したが、古墳時代の遺構面については、影響深度の関係上、一部分しか調査を行っていない。また、弥生時代の遺構面については検出することなく、調査を終了している。

基本層序 盛土・攪乱の下層には耕土層が数層確認された（淡灰色砂質土・淡灰茶色砂質土）。第1遺構面は茶褐色砂質土層を包含層として黄橙色砂質土上面で確認された。第1遺構面は中世後半頃と考えられる。

第2遺構面は淡灰黄色砂質土・橙灰色砂質土層の下層で検出された。ただし、影響深度部分は古墳の墳丘と周溝にあたるため、遺構面としては確認できていない。さらに下層は灰褐色砂質土・淡褐色粗砂質土・黄灰色砂混じり砂質土・淡灰色石混じり砂質土層が確認できたが、第3遺構面には達していない。



fig.164 散石検出状況

SX01 第1遺構面、調査区の南東で検出した石溜め遺構である。直径2.3m、深さ0.2mを測り、調査区外へと拡がる。中世後半頃のこの遺構はおそらく、古墳を削平した折に不要な葺石をかためて埋めたのではないかと考えられる。

古墳 第2遺構面からは、方墳の北東コーナーと考えられる葺石列を検出している。基底石は直径30cm～50cmの石を使用しており、コーナーは目地が通っていると考えられる石の並びである。基底石より多くても3段分の石しか残存しておらず、すぐ上層は耕土層等の水平堆積がみられることから、中世頃に大きく改変を受けていると考えられる。墳丘は淡灰褐色砂質土層の盛土と考えられる。

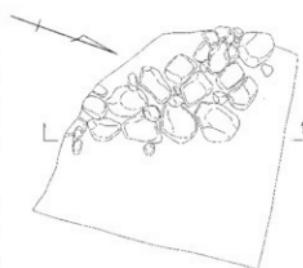


fig.165 第2遺構面平面図

周溝から遺物はほとんど出土しておらず、上層耕土層の遺物量から考えても、この古墳に埴輪ががらんでいた可能性は低いと考えられる。

3. まとめ 今回の調査は、限られた範囲ではあったが、方墳の葺石列を検出できた。これまでの調査から、1988年に県教委が調査された古墳と同一の古墳であると考えられる。この古墳は周溝のみを検出しており、葺石が見られないことから、コーナー付近にのみ石を葺いている古墳であると考えられる。周溝の幅は約2.5mであった。上層器小壺と鉢が出上している。

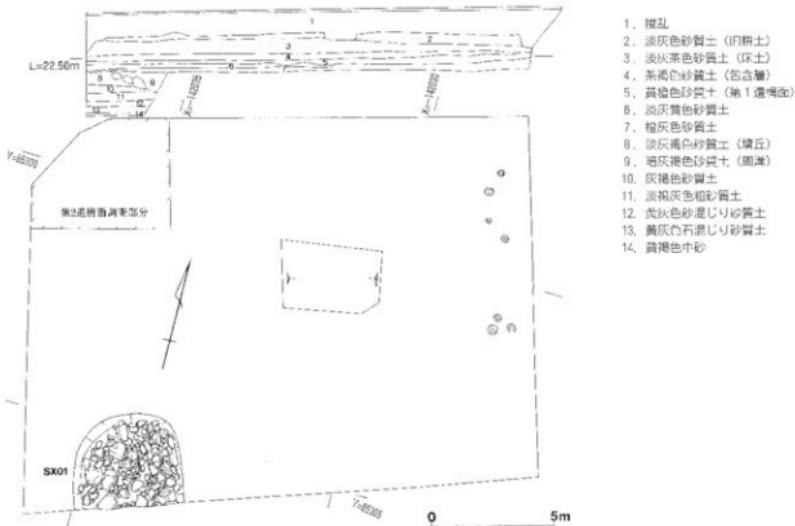


fig.166 第1遺構面平面図・断面図

3. 御影郷古酒蔵群 第2次調査

1. はじめに

灘五郷は江戸時代中期以降、酒の生産地として伊丹・池田など都市酒造業で栄えた從来の地域にかわって台頭する。灘の酒造りが興隆した要因としては、六甲山系からの急流を利用した水車精米の導入や西宮で良質の「宮水」が発見されたことや冬場の「六甲風」など気候条件が適していたことなどがあげられる。こうして造られた高品質の酒は、樽廻船などを利用して大消費地である江戸に運ばれた。

御影郷は、石屋川の両岸にかけての地域に位置し、東西1.5km、南北0.6kmほどの範囲にかつては、多くの酒蔵が密集した一角を構成し歴史的景観を有していた。

なお本調査の詳細な成果については、平成16年3月刊行の『御影郷波がえし蔵』を参照いただきたい。

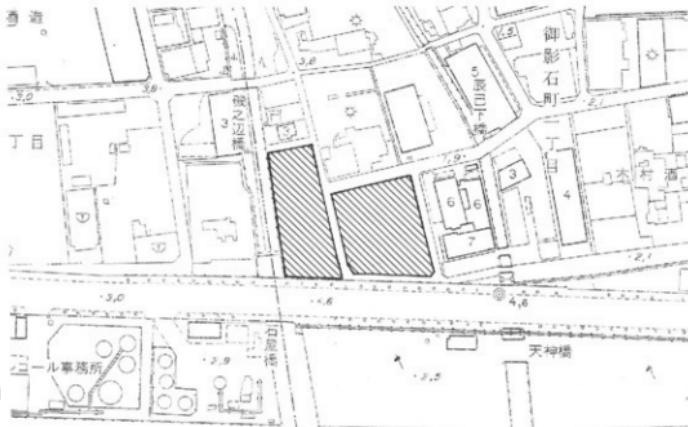


fig.167
調査地位図
1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は石屋川左岸の河口近くに存在した白鶴酒造の「石屋甲蔵・乙蔵（通称・波がえし蔵）」跡地である。

甲蔵

18世紀後半から現在までの釜場3基、槽場4基を確認した。うち釜場Ⅲと槽場Ⅳについては、江戸時代後期の遺構と考えられる。

釜場Ⅲ

釜場Ⅲの東隣につくられた18世紀後半～19世紀初頭の半地下式の構造をもつ遺構で東西5.0m、南北5.1m、深さ1.1mの規模である。石造りの施設であるが、石材はほとんど抜き取られていた。

槽場Ⅳ

調査区の北西隅で検出した半地下式の構造をもつ遺構である。南北7m以上、東西の幅4.9mの規模で南北に穿たれた男柱の掘形に挟まれて垂壠の抜き取り痕が確認された。また、南側には垂壠部に下りるための階段が3段設けられている。

構造や出土遺物から18世紀後半以降の槽場と考えられる。

乙蔵

江戸時代末から現代までの釜場2基、槽場2基とこれとは別に垂壠1基を確認した。

重豪は、16世紀末頃の備前焼大甕（二石入）の伝世品を利用したものである。

3. ま と め

今回の調査によって甲歳で3時期、乙歳で2時期の酒造関連遺構が確認できた。御影郷における酒造が江戸時代後期に遡ることが実証されたことや、同じ場所で江戸時代より現代までの酒造施設の変遷を体系的に把握できたことは、大変大きな意義があると考えられる。



fig.168
調査区全量

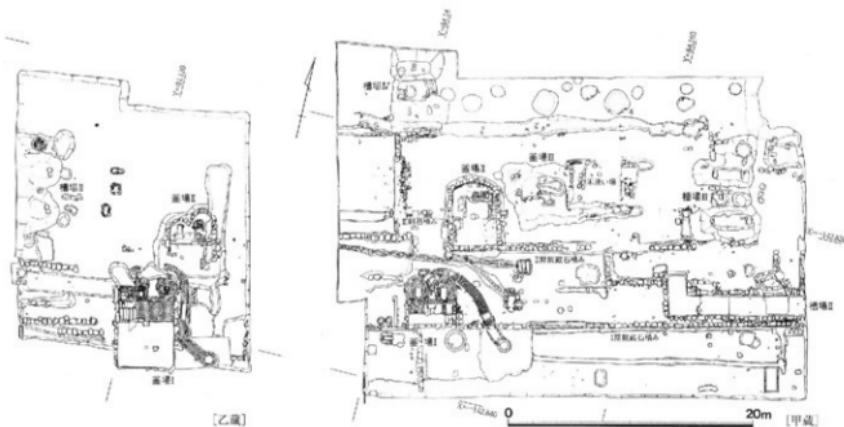


fig.169 調査区平面図

4. 御影郷古酒蔵群 第3次調査

1. はじめに

御影郷古酒蔵群は当地域で江戸時代後期に始まると考えられている酒蔵に関連する遺跡である。今回の調査区に近接した南側では2次調査が実施され、18世紀以降の酒蔵に伴う釜場と槽場等が確認されている。今回の調査地には、菊正宗石屋蔵が存在した。



円形の掘形に掘えられている。礎石の下面には根石も存在する。

- 槽場** 前蔵の北端で検出した。水圧あるいは油圧の機械式の槽場である。槽場の西側に接して垂壺を抜き取った土坑が検出されている。

槽場は右列により囲われており、東西3.0m以上×南北1.8mの長方形となる。内部に酒槽を据え付ける台座となる長方形の石が2ヶ所で確認されている。梢円形の土坑により搅乱されているが、この土坑は機械の支柱を抜き取るために掘削されたと考えられる。

垂壺を抜き取った土坑は東西約1.8m以上×南北約1.4mで深さ約90cmを測る長方形である。この土坑の北面には石列が存在する。また土坑の肩は板材により囲されていた状況も確認されている。

- 男柱1** 前蔵の中央北よりで検出した。東西約1.8m以上×南北約2.0mで、深さ約1.6mを測る方形の抜き取り坑として、確認している。底部に男柱下端の貫材を据え付ける為の枕石も検出されている。

抜き取りの埋土にはレンガが認められない事実から、江戸時代から遅くとも、近代初頭までに廃棄されたと判る。

- 男柱2** 前蔵の中央南よりで検出した。東西約2.0m以上×南北約2.4mで、深さ約1.8mを測る方形の抜き取り坑として、確認されている。

抜き取りの埋土にはレンガが認められる事実から、近代以降に廃棄されたと判る。

- 男柱3** 前蔵の南端で検出した。東西約2.2m以上×南北約2.3mで、深さ約2.0mを測る方形の抜き取り坑として、確認している。底部に男柱下端の貫材を据え付ける為の枕石も検出されている。

抜き取りの埋土にはレンガが認められる事実から、近代以降に廃棄されたと判る。

- 男柱4** 前蔵の北端で、槽場の下で検出した。水圧あるいは油圧の機械式の槽場より古い段階の、男柱の抜き取り坑である。

抜き取りの埋土にはレンガが認められない事実から、江戸時代から遅くとも、近代初頭



fig.172 男柱3

fig.171 槽場

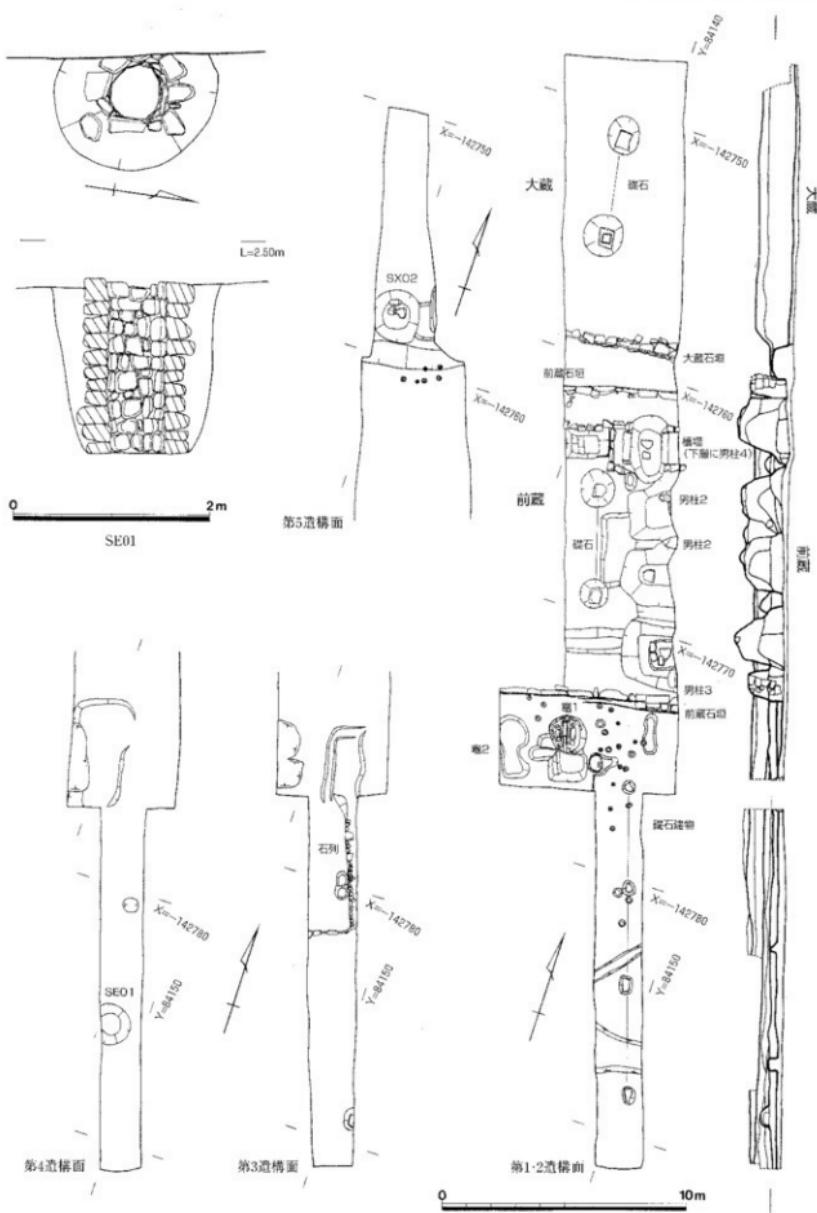


fig.173 調査区平面図・断面図

までに廃棄されたと判る。

礎石建物 調査区の南半から確認された。周囲は第1造構面と第2造構面が同一造構面で検出されており、江戸時代後期～近代にかけての建物である。

ほぼ南北方向に3間延びる礎石が確認されている。礎石間は約4.0～4.5mを測る。より南に礎石が延びる可能性も存在するが、調査範囲外のため不明である。礎石の幅約50～80cmで、深さ約20～30cmを測る。根石は使用されていない。

第2造構面 調査区の南端から江戸時代後期～近代にかけての竈2基等を検出している。

竈1 凝灰岩製の切石だけで構築されているが、廃棄時の堆積土層にはレンガが認められる事実から、江戸時代後期に造られ、近代に廃棄されたと判る竈である。

竈本体は径約170cmの円形となる。深さは約50cmを測る。壁面と底部は凝灰岩製の切石を使用している。壁面は縦長の長方形となる切石を並べており、2段積みまで遺存していた。底部も長方形の切石が敷き詰められ、灰焼き出し用の溝が設けられている。本来は粘土で被覆してあった様だが、この粘土はほとんど遺存していなかった。

焚口部は幅約160×120cmの横長の方形である。深さは約65cmを測る。炭化物が多く堆積していた。壁面等に切石は認められず、廃棄時に抜き取られた可能性がある。

竈2 竈1と並んだ西側に接して構築されている。東半だけの検出であり、西半は調査区外へ続いている。



fig.174 竈1

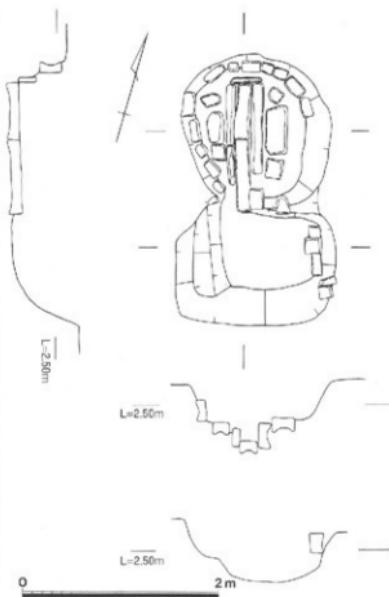


fig.175 竈1平面図・断面図

竈本体は径約160cmの円形だと考えられる。深さ約60cmを測る。構築材は廃棄時にすべて抜き取られ、遺存していない。

焚口部は幅約120cmの方形で、深さ約65cmを測る。炭化物が多く堆積していた。

遺物は瓦片が出土しただけである。

炉跡 窯1の焚口部を削平して造られている。幅約80cmの円形で、深さ約30cmを測る。壁面はレンガで固められており、内部は炭化物が多く堆積している。近代に造られた炉跡である。

S K01 窯1に削平されており、その構築前に造られている。径約60～80cmで深さ約30cmの円形部に、径約60×100cmで深さ約45cmの楕円形部が接合する形態の土坑である。

ピット群 径約15～35cmで深さ約15～45cmを測る。時期不明の陶磁器片や瓦片の他、鉄製品も出土している。ピットの用途等は不明である。

第3 遺構面 江戸時代中期～後期と考えられる石列の他、礎石や小溝を検出している。

石列 調査区の南半で検出した。南北方向に約5.5m延び、直角に曲がり西方向の調査区外へ続く石列である。石列は内部に向けて面を揃えており、この圍まれた内部は約10～15cmほど低くなっている。建物等の敷地を区画する石列であろう。

礎石 調査区の南端で検出した。この礎石は幅約50cmを測り、幅約70cmで深さ約40cmの掘形内部に据えられている。他の礎石は確認されておらず、建物としての並びは不明である。

S D01 幅約50cmで、深さ約10～30cmを測る小溝である。南北方向へ3.0m延びた後、東へ90°曲がり、途切れている。遺物は出土していない。

第4 遺構面 江戸時代中期の井戸や、炭化物や焼土を多く含む落ち込みを検出している。

S E01 石組の井戸である。内部で直径約60cm、深さ約1.7mを測り、掘形で幅約1.7m、深さ約1.7mを測る。

遺物は井戸の底部付近から平瓦片が出土しただけであり、出土遺物だけでは遺構の時期は判断できない。

第5 遺構面 18世紀の陶磁器や瓦片を含む、褐色砂質土層を除去した下面で確認した遺構面である。落ち込みとピット群を検出している。

S X02 径約2.2mで深さ約75cmを測る、ほぼ円形の落ち込みである。落ち込みの底部に大陸が3個確認されている。

この落ち込みの東側に接して不整形な落ち込みの肩が確認されている。この落ち込みは幅約1.6～2.2mで深さ約20cmまで確認している。

ピット群 S X02の南側に接して、多数のピットが検出されている。径約20cmで深さ約20cmを測る。遺物は出土していない。これらのピットの用途は不明である。



fig.178 S X02

3. まとめ 今回の調査では、江戸時代中

期に始まり近代以降に続く酒蔵を確認することができた。

第2遺構面では、江戸時代後期～近代にかけての竈を確認したが、これらは第1遺構面で確認した近代の前蔵より南側で検出されており、この時期、前蔵がより南側に存在したようである。また調査区南半のトレンチ調査で確認された礎石建物は、時期的に江戸時代後期か近代かは不明であるものの酒蔵に伴う何らかの付属建物が存在したようである。

第3遺構面では、石列や礎石、小溝を確認しているが、小溝の北側部分では薄い焼土層も検出されており、付近に釜場が存在する可能性も考えられる。調査区南半のトレンチ調査で確認した石列や礎石は、前蔵か付属建物に伴う遺構であろう。

第4遺構面では、石組みの井戸の他、焼土や炭化物を多く含む落ち込みを検出している。おそらく付近に釜場が存在すると考えられる。焼土や炭化物は、釜場から排出したもののが堆みに堆積したものであろう。時期はおそらく江戸時代中期である。

第5遺構面で検出された落ち込みS X01は、位置的にはかつて大蔵が存在していた場所である。全体的に見ると、江戸時代の前蔵は近代と比較して、より南側へ移動している状況が窺われる。この落ち込みが醸造に関係する遺構だとすれば、江戸時代中期の最も古い時期だけ前蔵の位置が北側へ移動している事となるが、調査面積が狭いこともあり詳細は不明である。



fig.177
第1遺構面全景

1. はじめに

篠原遺跡は六甲山南麓、都賀川左岸の傾斜地に立地する。これまでの発掘調査で縄文時代から中世に至る遺構・遺物が確認されている。縄文時代では中期の堅穴式住居・後期の土坑等も確認されているが、とりわけ晩期の遺物が顕著で、東北地方北部の土器である大洞式土器や遮光器上偶などが出土し、この時代における遠隔地の交流を示す事例としてこの遺跡の名を著名なものとしている。弥生時代は後期の堅穴式住居など、中世は掘建柱建物などの遺構が確認されている。



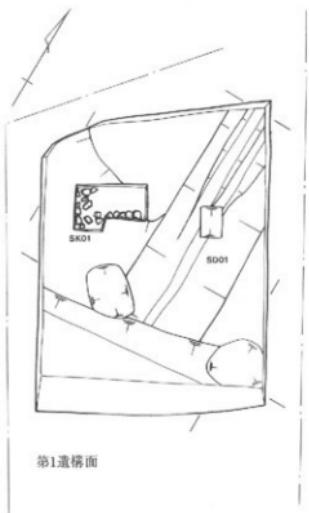


fig.180 調査区平面図・断面図

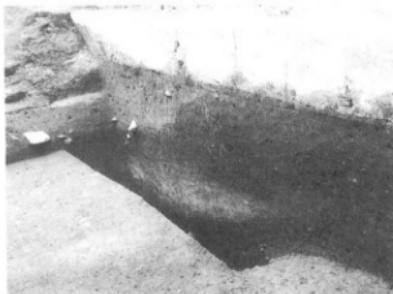
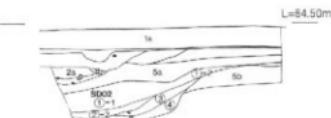
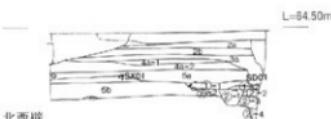


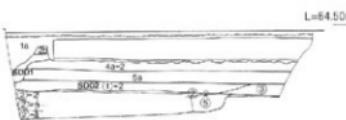
fig.179 S D 02断面



南西壁

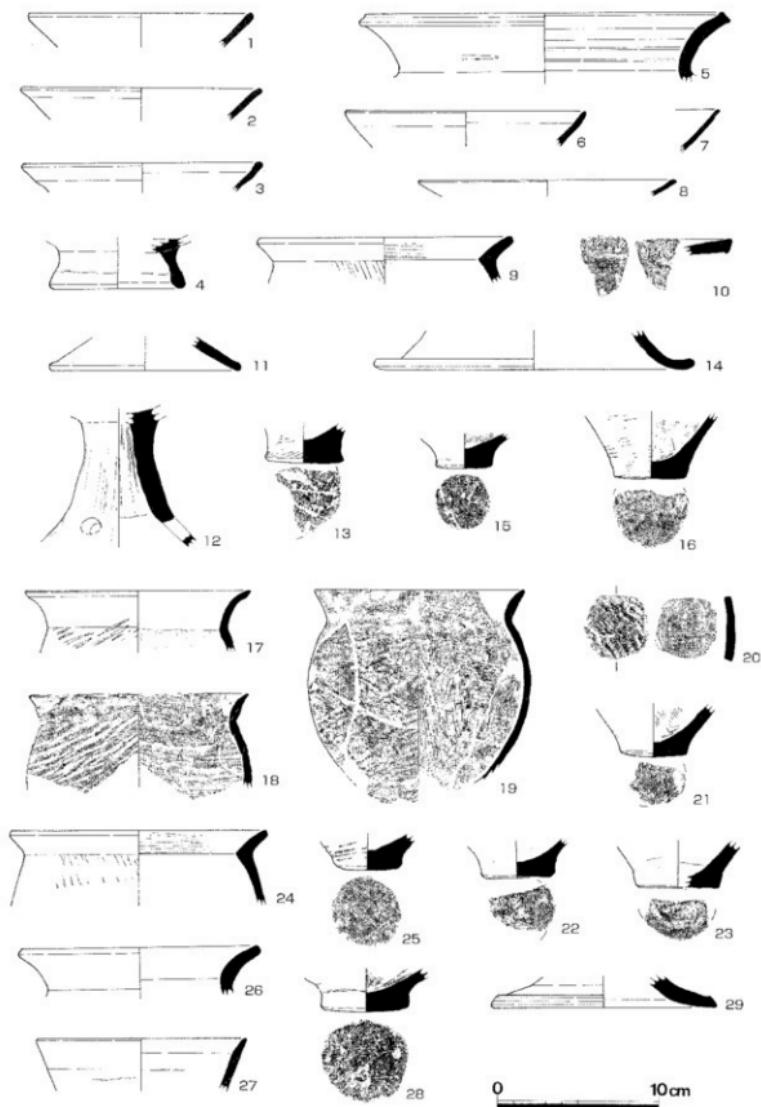


北西壁



北東壁

- 1a. 稲表土
 - 1b. 埋め土
 - 2a. 旧表土(耕土)
 - 2b. 淡黄色粘土混じり砂
 - 3a. 灰黄褐色シルト質砂
 - 4a-1. 灰黄褐色砂質シルト
 - 4a-2. 灰黄褐色砂質シルト
 - 5a. 黑褐色粘土質砂
- (1) -1段黄色シルトへ細砂(下位シルト分多し)
 - (2) -2段オーリーブ粘土混じり粗砂
 - (3) -1. 黑褐色砂質シルト
 - (2) -2. 1.に比べてやや暗い色調
 - (3) -3. 2.よりさらに色が薄い
 - (3) -2に堆積 50mmの範10%含む
 - (4) 灰褐色シルト質砂
 - (5) 黄褐色粘土混じり砂



1.1層 2~4. 3層 5~8. SD01 9~13. 5層 14~16. SX01 17~23. SX02 24~25. SX03 26~29. SD02 (1~3. 5~7.須器 4.土器 8.灰陶器 9~29. 土器 旁生土器)

fig.181 出土遺物実測図

- S X02 S X01の南で検出された。弥生時代末から古墳時代初頭の土器片がやや集中する部分である。
- S X03 径～3 cmの円礫の集積遺構である。円礫間に弥生時代末から古墳時代初頭の土器片が含まれる。
- S X04 径～5 cmの円礫の集積遺構である。5 b層を除去した段階で検出され、S X01～03と比べ検出のレベルが低い。S D02が埋没する過程での遺構である。工事影響範囲以下にあるため、遺構を検出したにとどまる。
- S D02 南北方向にのびる溝が南北方向に屈曲する溝である。幅約3.5 m・深さ1.25 mをはかり、断面は逆台形を呈する。明確に検出されたのは5 b層下面であるが、土層観察により5 a層下面から掘り込まれていることを確認した。
- 遺構検出レベルが工事影響範囲の底とほぼ同じレベルになるため、トレンチ3箇所を設定し堆積状況を確認するに止め、全掘はしていない。
- 出土遺物は弥生時代末から古墳時代初頭のものである。

3. まとめ 小面積の発掘であったが、環濠にもみえる弥生時代末から古墳時代初頭の溝S D02が確認されたことは大きな調査成果である。

これまでの篠原遺跡の調査において弥生時代後期の住居址等も確認されていたが、遮光器上偶の出土等で縄文時代晚期の遺跡として著名になりすぎ、弥生時代の遺跡としての篠原遺跡はその陰に隠れがちであった。

今回、環濠にも見える大溝が確認され、今後この遺構の状況が明らかになってくれば、縄文時代の遺跡という認識に加え、あるいは弥生時代の環濠集落としての遺跡としての新たな認識が加えられる可能性が出てくるだろう。



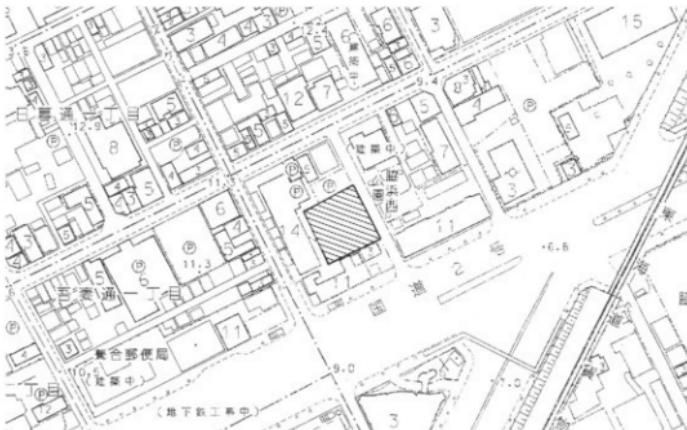
fig.182
第1遺構面全景

6. 日暮遺跡 第21次調査

1. はじめに

日暮遺跡は、中央区日暮通から筒井町にかけての一帯に存在する古代の集落である。この遺跡が発見されたのは、昭和61年で以来今回まで20回におよぶ発掘調査が実施されている。これまでの調査において、平安時代の住居址が数多く確認されている他、古墳時代の住居址も見つかっている。とくに平安時代の集落跡の調査では、皇朝錢を用いた建物の地鎮遺構が発見されるなど、古代の祭祀に関する興味深い例もみついている。

fig.183
調査地位図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査は当該地に計画された共同住宅建設に伴うものである。工事予定範囲のうちかなりの部分が従前の建物によって地中深くまで搅乱されており、これを免れた部分をⅠ～Ⅲ区とし調査を実施した。

基本層序

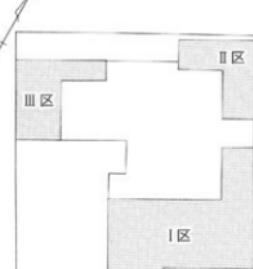
現在の地表面は標高約10.3m前後を測る。上層は75～100cmの整地層で調査区の東側では直下に旧耕土が20cmほど堆積する。かわりに西側においては古代の遺物を含む暗灰色砂質土が堆積する。それを除去すると飛鳥時代のベース層となる灰黄色砂質粘土が調査区の西側に、黄灰色粘土が東側には堆積している。このベース層の下には、古墳時代中期～後期の遺物を含む洪積砂がみられる。砂層はⅠ区全体で

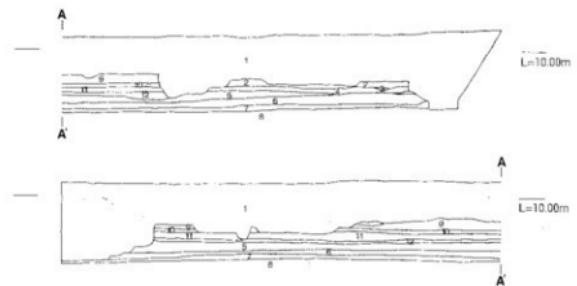
fig.184 調査区配置図

確認できるが西側ほど層厚は薄くなり調査区の西端部分で収斂されなくなっている。

洪積砂の下層には、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物を含む黒色粘土が20cm前後堆積し地山面である黒灰色粘土に達する。

以下、主な遺構・遺物について略述する。





1. 現代の埴土 2. 褐黄色砂質粘土（1～3cm大花崗岩粒混） 3. 鳴黃灰色粗砂
 4. 褐黄色砂質粘土（1～3cm大花崗岩粒混・飛鳥時代遺構面） 5. 黄灰色粗砂（古墳時代洪水）
 6. 黑色粘土（弥生時代の土器含む） 7. 黑色粘土（地山層） 8. 淡灰色粘土（地山層）
 9. 棕色砂質粘土 10. 黄灰色粘土（飛鳥時代遺構面） 11. 灰色粘土 12. 淡灰色砂質粘土

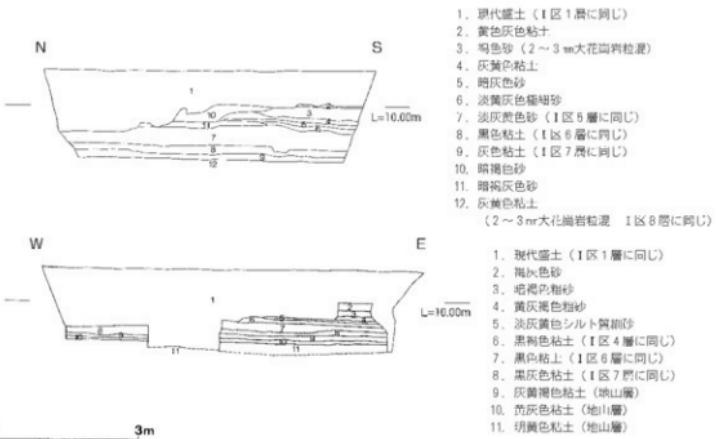


fig.185
調査区断面図 0 3m

I 区 今回の調査で検出された遺構の大半は、I区に集中していた。飛鳥時代（古代）の遺構面において、溝1条、土坑2基、落ち込み4基を検出した。

S D01 調査区の西端で検出された南北方向に走る溝で、幅70cm、深さ約10cmである。今回、確認できたのは、長さ約4.1mで両端は從前の建物によって搅乱されているために全体像は不明である。

溝内からは、遺物が多く出土している。飛鳥II式の範疇に含まれるものと考えられる。

S K01・02 いずれも直径約50cm、深さ15cmほどの土坑であるが、搅乱のためごく一部を検出したにとどまる。調査区の東にのびると考えられる。

落ち込み この他4基の落ち込みを検出した。（S X101～104）いずれも検出できたのは一部分で、調査区外へ拡がっているものと考えられる。

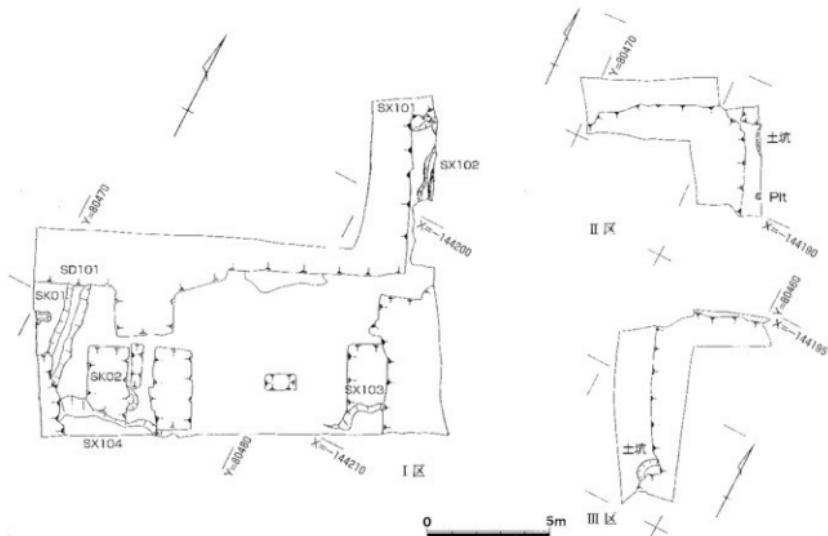


fig.186 調査区平面図

どれも直徑3.5m～2.0mで、深さ10cm前後の浅い造構である。

II区 約半分が従前の建物の搅乱により遺跡が壊されている。I区より約40cm高いところで飛鳥時代の造構面を確認した。

検山された造構は、直徑70cm以上と考えられる土坑の一部と直徑25cm、深さ約10cmのピット1基である。

III区 III区においてもII区同様に約半分が搅乱によって遺跡が壊されている。

II区よりさらに高い標高9.7mで飛鳥時代の造構面は確認したが、造構は検出されなかつた。このIII区においては、下層を覆う古墳時代の洪水砂は確認されておらず黒色粘土が直に認められる。さらに下層の地山層において直徑1.1m以上、深さ10cm程度の円形の土坑を検出した。

3. まとめ 今回の調査においては、弥生時代末～古墳時代初頭の造構面と飛鳥時代の造構面との2時期の造構面を確認した。

今回の調査結果で注目されるのは、I区のSD01が検山高や層位がほぼ同じであるのに、西に隣接する調査地で発見されている平安時代の掘立柱建物群よりも古いことである。日暮遺跡の古代集落は、飛鳥時代から平安時代までの長期にわたって継続したものと考えられる。また、西に隣接する調査地にくらべて、造構密度が低いこと、今回の調査区内においても西側ほど造構が多いことなどから集落の中心は西側に存在すると考えられる。

さらに今回の調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の遺物包含層とその下層に存在する造構面を確認した。過去の調査においてもこの時期の住居址がみつかっており周辺には、弥生時代の集落も営まれたと考えられる。



fig.187
I 区全景



fig.188
出土造物

7. 熊内遺跡 第4次調査

1. はじめに

熊内遺跡は、平成元年の試掘調査により発見された遺跡である。第1次調査は、平成2年に共同住宅建設に伴い発掘調査が行われた。今回の調査は第4次調査となり、第2次調査地の東隣にあたる場所である。

当遺跡は六甲山系から流れ出た川によって形成された扇状地の斜面上に立地している。今回の調査地の現況地盤の標高は350mで、北東から南西に向かって緩やかに傾斜した地形に立地している。



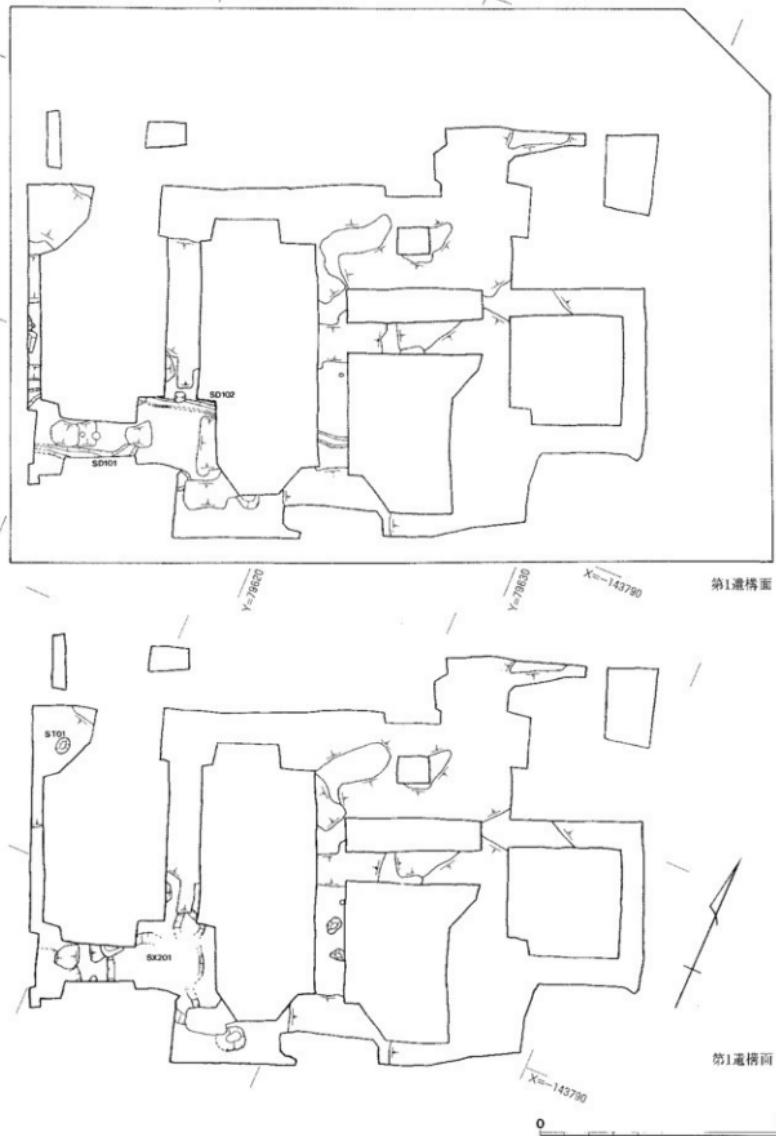


fig.190 調査区平面図



fig.191
第1造構面全景

- S D101** 南西隅のトレンチで検出された東西方向の溝である。そのトレンチ内で収まるため全体規模については判らないが、幅約40cm、深さ約7cmの浅い溝であるが土師器の細片しか出土していない時期は判らない。
- S D102** 調査地の南西側で3箇所のトレンチに連なって検出された東西方向の溝である。幅30～40cm、深さ約10cmの浅い溝である。溝の埋土から土師器の細片が僅かしか出土しなく、時期の特定はできなかった。

- 第2造構面** この造構面において土坑、ピットと落ち込みを検出している。
- 土坑** 計5基の土坑を検出した。いずれの土坑も深さが10～15cmと浅く遺物は出土していない。
- S X201** 調査地の南西側において落ち込み状の造構を検出した。東西幅3.8m、南北長3.6mと推定される。深さ25cmを測る造構からは、土師器或いは弥生土器片が出土している。

3. まとめ 第3次調査において、弥生時代後期の住居址と環濠を確認し、この地域が環濠集落の内側に位置していると推定されているため、その時期に該当する造構の検出を予測していたが、従前建物により搅乱が著しく造構面は調査対象の1/4しか残存しておらず、また、調査トレンチが狭小であったため、当地における遺跡の性格を十分に把握できなかった。

今回の調査で、造構面を2時期確認した。第1造構面で検出した造構から時期を確定できる遺物がないため詳細な時期については判らないが、遺物包含層からの出土物により中世以前ということが判る。第2造構面も顕著な造構は乏しく、遺物包含層と壺棺墓から弥生時代後期と判った。

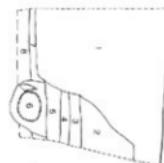
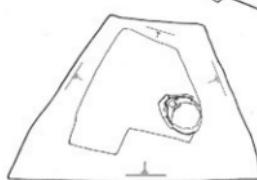
熊内遺跡は縄文時代早期に始まり、弥生時代後期には環濠集落も営まれた遺跡である。そして、断続的ではあるが古墳時代後期まで確認されている。今後、遺跡の東辺部の調査が増えると遺跡の性格が詳細にわかると考えられる。



fig.192
G r.-10
麥出土状況



fig.193
G r.-10
平面図・断面図



1. 墓葬
2. 盛土
3. 濁灰色砂質シルト
4. 濁灰色砂質シルト
(黒灰色砂質土混じり)
5. 黑灰色砂質土
6. 黑灰色砂質土
7. 淡黒灰色砂質土
8. 深灰色砂質土

0 2m



0 20cm (STO1壺棺)

fig.194 出土遺物実測図



fig.195 出土遺物

8. 熊内遺跡 第5次調査

1. はじめに

今回の調査は第5次調査となる。熊内遺跡では、過去に西側の地域を中心に調査を行ってきたが、今回初めて東の地域を行うこととなった。

布引から東側の雲中小学校間の山手幹線（長田・楠・日尾線）の中央分離帯北側に幅2m強の雨水溝を設置するため、試掘調査を実施したところ雲中小学校側で埋蔵文化財が発見されたため、その区間120mについて調査を実施した。

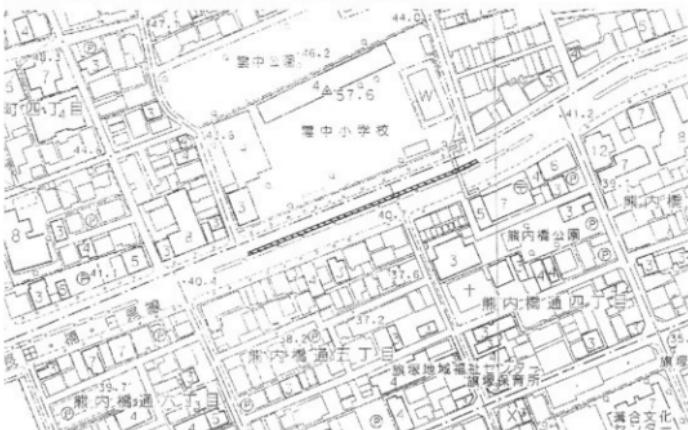


fig.196
調査位置図
1:2,500

2. 調査の概要

調査は、東行きの車線の中央分離帯側の幅2m間で、土留めのためのH鋼を全域に入れて実施した。

便宜上、西側の調査開始の基点となる箇所を0m地点とし、ここから東への距離で調査部分（区間）を示すこととした。また遺構が検出された区間をA地点・B地点とし、調査終了地点は117m地点となる。また9~18m区間は谷地形となり、黒褐色シルト層から土師器、弥生土器（後期）が少量出土した。遺構については皆無であった。

周辺の調査から遺構面は2面以上確認されているが、今回の調査区間では、一面のみが検出された。

基本層序

現況地表面の標高は約40.9mの高さである。調査区間が約120mあるため、遺構・遺物の集中する層序を基本層序とする。上層より、アスファルト、盛土、耕土、中世から近世までの旧耕土層である灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質シルト、遺物包含層である暗褐灰色砂質シルト・黒褐色シルト（上面が遺構面）、暗灰茶褐色砂質土（基盤層）となる。

A地点

23~35m区間ににおいて、堅穴住居・ピット等を検出した。標高は39.1m（道路面からの深さ約120cm）である。

S B01

堅穴住居（S B01）は、北端の部分を検出した。復元した径は約6mの円形となり、検出面からの深さは、約10cmである。出土遺物は、弥生土器の細片が少量出土している。ピッ

トは、径10~30cmで深さ10~20cmであるが、遺物は出土しなかった。

B地点

50~68m区間において、土坑3基、落ち込み2基、ピットを多数検出した。各遺構からの出土遺物がないため時期については不明であるが、遺物包含層からは、弥生土器後期と土師器が出土している。

80mから東側については、遺構・遺物とも皆無となった。今まで遺構面として検出してきた層と明らかに変わってきてている状況である。特に、東端については黒褐色の層はあるものの、砂の混じる割合が多く、面が少しづつ下がってきていて不安定になってきている。

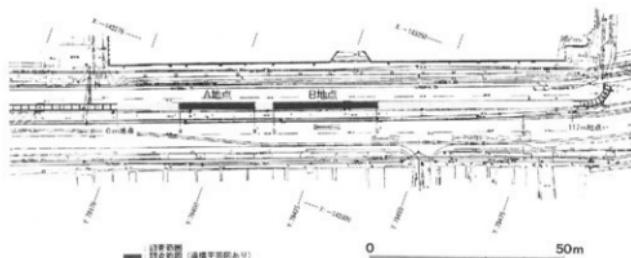
3. まとめ

第3次調査において、弥生時代後期の住居址と環濠の西側を確認したため、今回の調査で東側の部分を期待したが、濠状の遺構は確認できなかった。

調査状況が制限されていたため十分な成果を出せなかっただが、竪穴住居を1棟確認したことは、この地域にも居住域が広がっていることを追認する結果となった。特に、遺跡内を東西に縦断して調査を行ったことにより、遺跡の範囲がある程度理解できたと思う。また、遺物包含層から奈良時代~平安時代の須恵器が出土しているため、周辺にその時期に該当する集落の存在する可能性が考えられる。

熊内遺跡は縄文時代早期に始まり、弥生時代後期には環濠集落も営まれた遺跡である。そして、断続的ではあるが古墳時代後期まで確認されている。今後、遺跡の調査が増えると遺跡の性格が詳細にわかると考えられる。

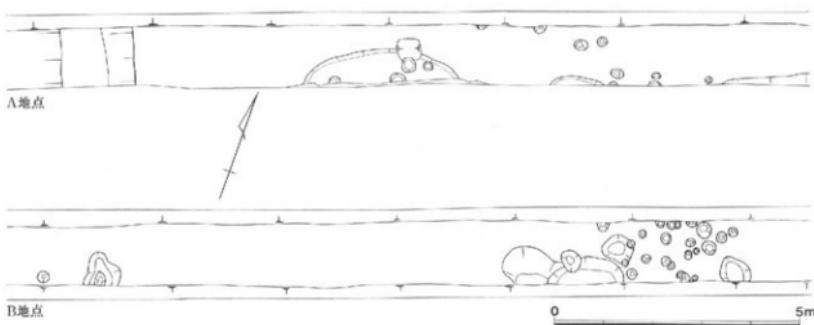
fig.197
調査区配図



A地点

B地点

fig.198 調査区平面図



9. 中遺跡

1. はじめに

中遺跡は、神戸市域の北東部に位置する。この地域は有馬川・有野川・長尾川・八多川という小河川が開析した面積の狭い河谷が形成されており、それらの段丘・沖積微高地上に遺跡が点在している。また、丘陵上にも、古墳時代後期を主体とする古墳が群集する場所が認められる。当遺跡については、平成7年度より、兵庫県教育委員会による、道場八多地区特定区画整理事業に伴う発掘調査が行われた。これまでに弥生時代末期から室町時代までの遺構・遺物が発見され、遺跡の様相が明らかになりつつある。

fig.199
調査地位図
1:2,500



2. 調査の概要

今回の調査地は、県道三木三田線沿いの道路拡幅予定地の未調査部分（1区）と工事設計変更によって、新たに調査が必要となった道路計画部分（2区）の合わせて2ヵ所の調査を実施した。なお、今回の調査地付近は、兵庫県教育委員会による調査が行われ、墳丘が削平されて周溝のみが残存した6世紀頃の古墳が検出されている。

1区

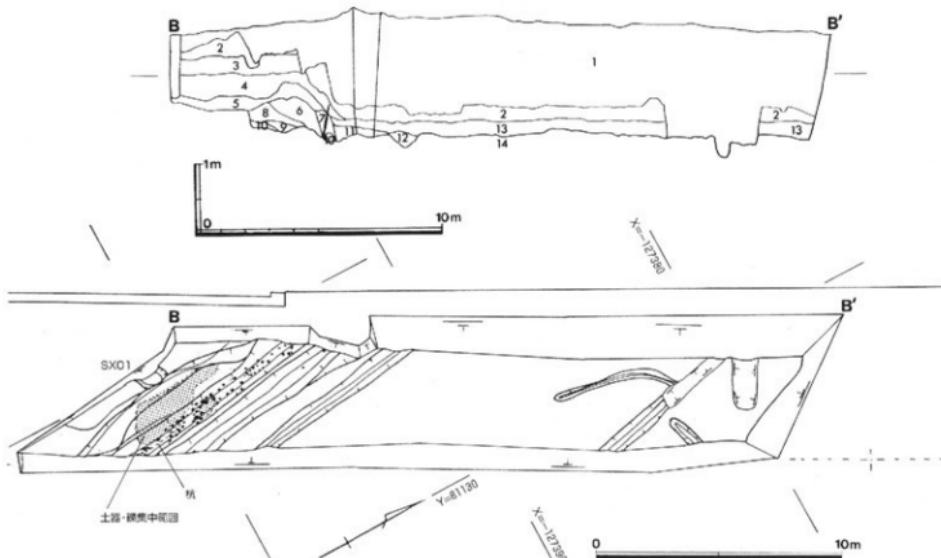
基本層序は、1. パラス・瓦礫・粘質土（盛土）、2. 黒色粘質土（現代耕作土）、3. 黄灰色粘性砂質土（中世末頃～近世の耕土層）、4. 灰色粘性砂質土（鎌倉時代末～室町時代の耕作土層）、5. 褐灰色砂質シルト（鎌倉時代頃の耕作土層）、6. 灰色～黒灰色系（砂質）シルト（鎌倉時代頃の造成土）、7. 黄灰色極細砂～シルト（遺構検出面）である。

調査区の南側約3分の1は、北東へ下がる斜面となり、それより北は、鎌倉時代頃の耕作地造成に伴い平坦地となっている。遺構検出面のレベルは、標高173.1～173.6m前後を測る。

検出遺構

調査区南側の斜面付近は、鎌倉時代頃に耕作地とするために、盛土が行われていた。その末端付近には浅い溝が掘られ、多くの杭が打ち込まれていた（調査地内で63本確認）。これらは、盛土がずれないようにするための、土留めの杭と推定される。杭は細い木の幹

fig.200
1区
集石・杭
出土状況



1. バラス・瓦砾・粘質土(感土)
2. 黒色粘質土(現代耕作土)
3. 黑色粘質土や灰色がかかる
3. 灰色粘質土(中世末頃～近世の耕作土層)
4. 灰色粘性的質土(鎌倉時代末～室町時代頃の耕作土層)
4. 浅灰色粘質土(鎌倉時代頃の耕作土層)
5. 灰色シルト(鎌倉時代頃の造成土)
6. 黑色シルト(鎌倉時代頃の造成土)
7. 淡褐色シルト(鎌倉時代頃の造成土)
8. 淡褐色シルト(鎌倉時代頃の造成土)
9. 淡褐色シルト(鎌倉時代頃の造成土)
10. 淡褐色混じり灰褐色シルト(鎌倉時代頃の造成土)
11. 黄褐色細砂混じり淡灰色シルト(鎌倉時代頃の造成土)
12. 淡褐色砂質シルト(中世濁泥質土)
13. 黄褐色混じり灰色砂質シルト(中世耕作土)
14. 黄褐色細砂混じりシルト(遺構様出面)

fig.201 1区平面図・断面図

または枝を裁断し、先を削って尖らせており、直徑5~10cm程度のものが多い。また、角材を転用したものも少數認められる。また、斜面の盛土内からは、古墳時代後期の土器と共に拳大の礫が多數発見された。付近にあった当該時期の遺構を削平して、盛土に使用したと推測される。

鎌倉時代頃の耕作地造成によって、平坦面となった北側の3分の2には耕作に伴う、溝が4条検出された。このうち、2条は南北方向に延び、幅60~70cm前後、深さ10~30cmである。その他の溝は、弧状になったり、ごく一部しか検出できなかつたりするがいずれも浅いもので、耕作地の給排水を行う遺構と判断される。

2区

基本層序

基本層序は、1. 砂礫土（盛土）、2. 黒灰色粘性砂質土（現代耕作土）、3. 黄灰色粘性砂質土（旧耕作土）、4. 暗灰色系粘性砂質土（中世耕作土：古墳時代・鎌倉時代の土器を含む）、5. 黄灰色粘質土（中世耕作土：古墳時代・鎌倉時代の土器を含む）、6. 黄灰色砂質シルト（遺構検出面）となる。西端と東端部分がやや高く、中央部分が30cmほど窪み、やや低湿な状況を呈している。遺構検出面は、西端では174.4m前後、東端では174.2mを測る。

検出遺構

西端で浅い溝状の遺構3条、東端でピット2基と、浅い落ち込みを検出した。

溝状の遺構は、北東~南西方向に延び、中世耕作土と同質の暗灰色系粘性砂質土が堆積し、深さは5cm前後である。耕作に伴う溝と判断される。

ピットは直径20~30cm、深さ約10cm、不定形な落ち込みは深さ30cm程度で、木の根の痕

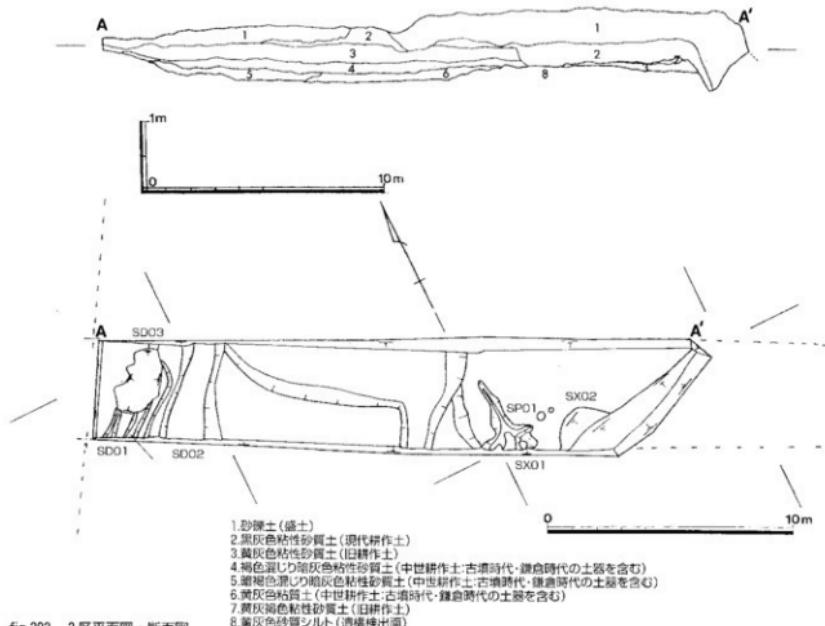


fig.202 2区平面図・断面図



fig. 203
2区全景

跡と思われる。いずれも中世耕作土と同質の埋土である。

試掘坑

2区の東側は、一段下がった地形となっており、遺跡の分布状況が不明なため、道路計画部分に 3×3 m の試掘坑を 1ヶ所設定した。調査の結果、盛土下に現代耕作土、黄灰色粘性砂質土、暗灰色砂質シルト、黒灰色シルト（現地表下 90cm）が堆積する。暗灰色砂質シルト以下は湿地状の土質を呈して湧水が多く、遺構は存在しないと判断された。

3. まとめ

今回の調査では、鎌倉時代に開墾された耕作地やそれに伴う溝、杭群、ピット等が検出された。これまでの兵庫県教育委員会による調査結果と重ねあわせてみると、1区の耕作地造成の盛土内で発見された古墳時代の土器や大量の礫は、すぐ南側で検出された古墳（堂ノ元地区 3号墳）の埴丘盛土やその周辺に含まれていた可能性が濃厚である。この古墳は鎌倉時代の水田造成時に削平され、周溝のみが確認されている。この時、削平された埴丘盛土が斜面を埋める土に用いられたと推測される。報告書によると、周溝内からは、礫は出土していないようであり、埴丘に葺石が施されていた可能性は低いという。これらの礫については棺を納める墓坑に用いられた可能性が指摘されるが、それを検証することは不可能であり、推測の域に止まるものである。

2区では、鎌倉時代の耕作地に伴う溝やピット等が確認された。付近の調査では古墳（堂ノ元地区 1・2号墳）が確認されているが、当該時期の遺構は確認できなかった。しかし、中世の耕作土からは、古墳時代後期（5世紀末～6世紀初め）の土器が破片で出土し、古墳の埴丘やその周辺に供えられた土器類が耕作時に搅乱されたと推測される。

10. 野瀬北遺跡 第2-1~3次調査

1. はじめに

野瀬北遺跡は、神戸市北区淡河町野瀬に所在する。遺跡は、美嚢川の支流である淡河川の上流域右岸の河岸段丘及び丘陵斜面上に立地している。平成13・14年度に圃場整備事業に伴う試掘調査を実施した結果、平安時代前期あるいは中世～近世にかけての集落遺跡の存在が確認され、平成14年度に初めて発掘調査を実施している。

昨年度実施した第1次調査では、中世後期～近世に至る造構・遺物を検出し、当該時期の集落域の様相の一端を知る資料を得た。特に注目されるのは2時期にわたる礎石建物で上淡河地域の有力者の屋敷跡である可能性が考えられている。



fig.204
調査位置図
1:5,000

2. 調査の概要

今回の調査も圃場整備事業地内の切土部分及び水路部分の調査である。第1次調査の調査区名に続けて調査区名を設定して調査を実施した。

2-1次

調査対象地は田圃1面であり、7区として調査を実施した。当調査区は、第1次調査5区の南西約25mに位置している。西側に埋没谷が存在するほか、南西側では旧地形の斜面を検出しており北東部2分の1強にはば地山面上を基盤層とする緩斜面の造構面を検出している。検出した造構は上坑4基、ピット6基、落ち込み1ヶ所である。造構はすべて東半部で検出した。時期のわかる造構については、いずれも近世のものと考えられる。

S K01

径 1.03×0.97 m、深さ30cmの平面形が円形の上坑である。底部中央付近で人頭大及び拳大の礎を計10個程度並べたような状態で検出している。この礎の意味も含めて造構の性格などについては不明である。出土遺物もなく、時期についても不明であるが、検出状況から、他の造構と同様に近世のものと考えられる。

S K02

径 1.85×1.73 m、深さ50cmの樫形をもち、内部に径約1.2m、高さ42cmの桶を据えており、埋桶造構と考えられる。桶は、底板の遺存状態は良好であるが立板の遺存状態は悪く、取り上げは不可能であった。桶内埋土中から土師器・陶器・磁器・瓦・漆塗碗が出土しており、これらは主に平安時代後期～近世のものである。

り、近世のものと考えられる。

- S K03 径 2.15×1.50 m、深さ50cmの掘形をもち、内部に径 1.2×1.0 mの範囲に拳大程度の礫の詰まる部分がある。礫層の周囲にはS K02と同様に灰黄色系の粘質土を充填しており、本来S K02と同様に桶を掘えていたが桶を取り出した後廃棄したものと考えられる。陶器・磁器・鉄・銅が出土しており、近世のものと考えられる。
- S X01 径 1.77×1.70 m、深さ24cmの方形の土坑で、近世の陶器・磁器・釘が出土している。
- ピット ピットは計6基検出したが、建物としてのまとまりは認められない。径60cm前後、深さ5cm程度のものが大半であるが、S P01は径70cm、深さ29cm、S P02は径44×36cm、深さ12cmを測る。S P01のみ土師器・磁器の小片が出土しているが、時期は不明である。
- 2-2次 調査区は、第2-1次調査7区の南東約70mに位置している。段丘上に立地しており、調査区の東側は淡河川によって大きく削られて急斜面となっている。
- S K01 草本層序は、耕上・床上の直下に厚さ30cmの旧耕土が堆積し、その下層に灰色～灰(褐)色のシルト系の土層が約50cmの厚さで堆積している。このシルト系の土層から中世の須恵器、土師器、陶器片が28リットル入りコンテナ2箱分出土している。さらに下層の淡灰色～淡黄灰色シルト上面で造構面を確認した。検出した造構は土坑2基、ピット3基である。
- S K02 調査区中央部南西隅で検出した土坑で、径65cmの不整円形を呈し、深さは9cmを測る。下層に炭屑が堆積している。出土遺物はなく、時期や性格については不明である。
- ピット 調査区中央部で検出した土坑で、南側は攪乱により失われている。検出した規模は、 1.3×1.0 m、深さ20cmを測る。中世の須恵器、土師器片が出土している。小片のため、詳細な時期については不明である。
- ピット ピットはいずれも径20cm程度で、深さ2～12cmを測る。遺物は出土していない。

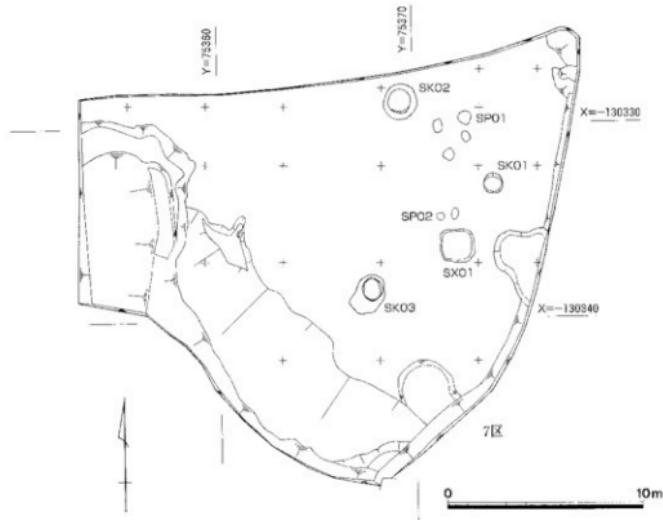


fig.205
7区
平面図

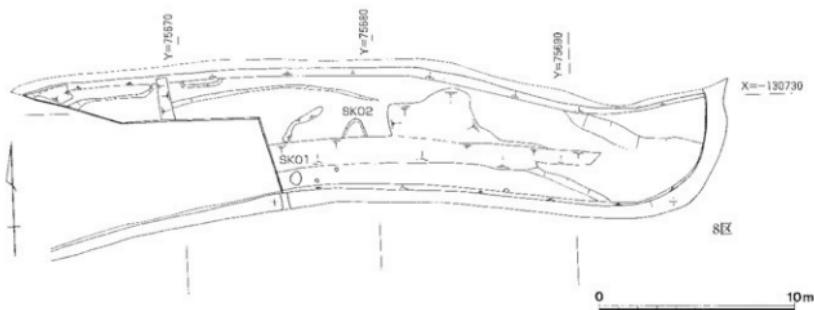


fig.206 8区平面図

2～3次 幅3.0～3.5mの水路部分の調査である。調査区名は10区と呼称する。

床土上面から25～70cmで、黄灰色～黄灰茶色疊混じり粘質土上面を基盤層とする遺構面を検出した。遺構面は調査区内では北西隅が最も高く、南・東側に下がる状況で検出しておらず、全体的には西が高く、東が低い緩斜面にあたっている。調査区東部では涌水もみられ、調査区の東側に埋没した谷が存在する状況が窺える。

遺構は、土坑1基、ピット28基、落ち込み3基を検出したが、ピット3基以外の遺構は全て、高位に位置する、調査区西半の南北方向のトレンチ部分で確認している。遺構の時期については、概ね鎌倉時代頃と考えられる。

S X01 調査区南半部中央で検出した不定形の落ち込みである。東側が調査区外に延びるため正確な規模については不明である。南半部は深さ6cmと浅いが、北半部は深さ20cmと深くなっている。北半部は西側に溝が取り付く状況を呈しており、水溜めのような性格が考えられるが、詳細は不明である。土師器小片が出土しているが、時期については不明である。

S X02・03 調査区南半部で検出した並走する溝状の落ち込みである。ともに深さ10cm程度の深いもので、中世の土器が出土している。遺物は、遺構の西端部に特に集中している。S X02からは完形に近い十師器皿や、須恵器碗、青磁碗片などが出上している。

ピット ピットは径20～40cmのものと径60cm程度のものに大別できる。前者は調査区南半部に特に多く集中し、掘立柱建物の柱穴を含むものと考えられるが、調査区内では建物としてのまとまりを確定できない。調査区の西側に広がる高位に位置する平坦面に建物の広がりを求めることが出来るものと考えられる。

後者は調査区北西部と南端部で計4基検出した。北西部の3基は深さ14cm、南端部の1基は深さ6cmを測る。これらの4基については、柱穴というよりは上坑として捉えた方が適当と考えられる。北西部のS P19・20は近接して検出したが、ともに下層に炭層が堆積しており、同様の性格をもつものと考えられるが、その性格について現段階では確定できない。S P19からは土師器皿（大・小）完形品や須恵器底部などが出土している。S P20からは土師器皿や須恵器片が出土している。他のピットのうち、遺物が出土しているのはS P01～03・06・11・12・14～18・20～22であるが、大半が小片である。そのなかで、

S P03・06は須恵器片口鉢の大型の破片が出土している。

確認調査

埋蔵文化財の存在状況について、さらに詳しくその状況を把握するために、第2-3次調査10区の東約50mの地点で、幅2m、長さ15mの南北方向のトレンチ調査を実施した。

調査の結果、明確な遺物包含層や遺構面が確認されず、遺物も少量出土したのみであった。以上の状況は、第2-3次調査10区の東側の埋没谷がこのトレンチの位置までは続いていることによるものと考えられる。

3. まとめ 第2-1次調査(7区)では、近世の遺構を確認しており当該時期の集落域の一部であることは明確である。遺構が確認されたのは調査区東半部に限定されるが、調査区の西部に近世以降に埋められたと考えられる谷が存在することに加え、当調査区の東側、第1次調査5区との間に谷が存在することなどから、集落が存在できる緩斜面が狭いという制約を受けた結果とも考えられ、集落域の縁辺部に位置している状況が窺える。第1次調査5区で検出したような中世末頃の遺構・遺物が検出されなかったこともこの状況を示しているものと考えられ、近世になってようやくこの狭小な丘陵斜面の先端部分にまで開発が及んだものといえよう。

第2-2次調査(8区)は、全体的には遺構の密度は希薄な状況であった。調査区が幅狭の細長い田園面にあたっていることなどの地形的な制約を大きく受けているものと考えられるが、集落域の縁辺部に位置している状況を確認できたものといえる。

第2-3次調査(10区)では、調査面積が限定されていたにもかかわらず、密集した状況で遺構を確認した。これらの遺構は、大半が調査区西半部で確認しており、谷地形に向かう調査区東半部ではほとんど検出されなかった。よって、集落域の東側縁辺部に今回の調査区が位置していることが想定され、集落の中心は、調査区の西側の未調査部分に広がる広大な平坦面に存在することが十分予想できる。

